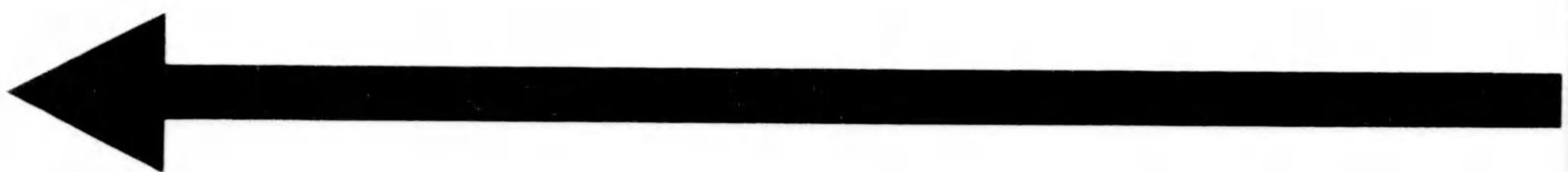


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



羽 樣 荷 香 作
須 藤 宗 方 書

雲

大 阪 樋 口 隆 文 館 發 行



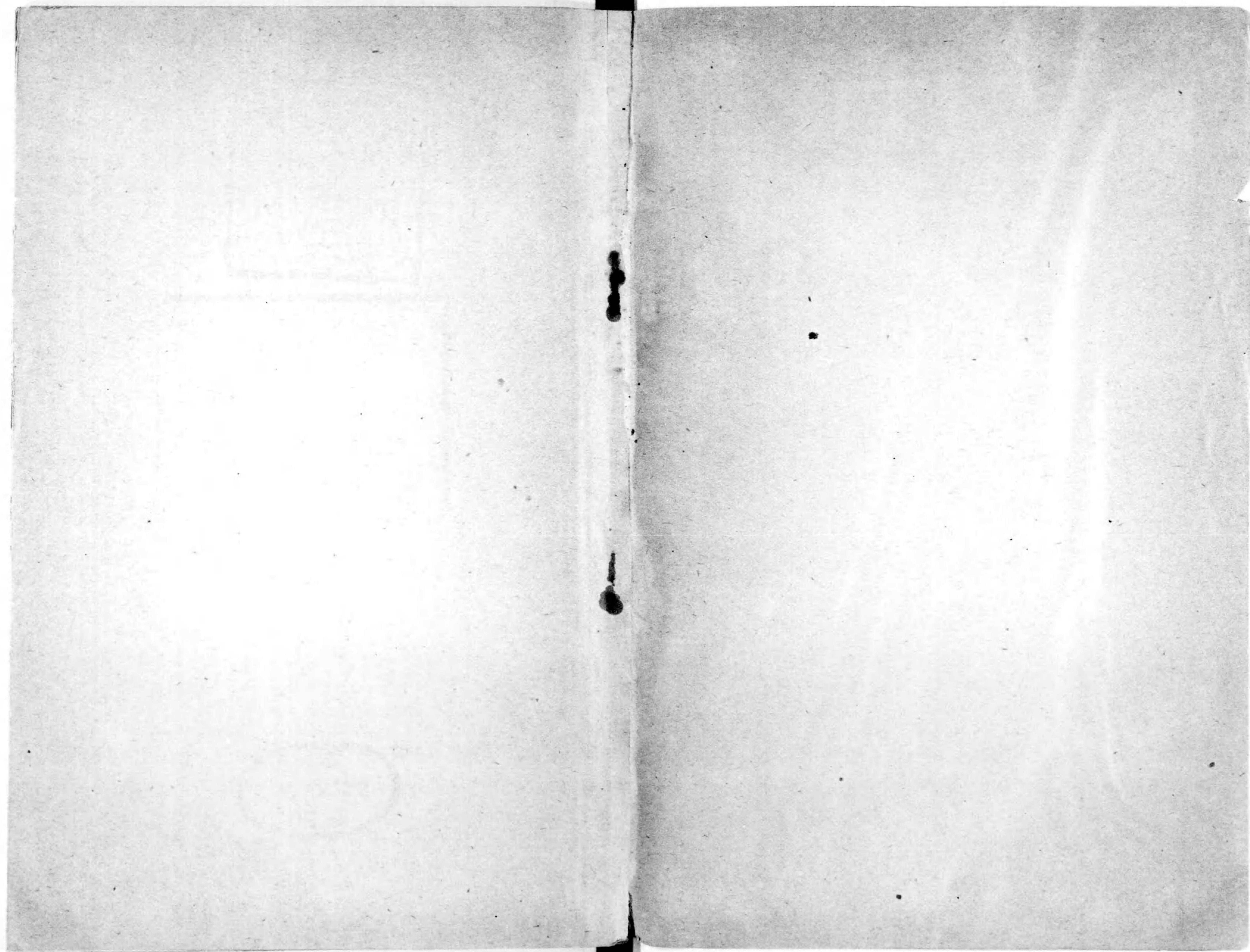
羽 樣 荷 香 作
須 藤 宗 方 畫

雲くも

大 阪

樋 口 隆 文 館 發 行





特105
221



雲

羽樣荷香作
須藤宗方畫

大正
4. 12. 22
内交





◀ 次目説小刊新館文隆口樋 ▶

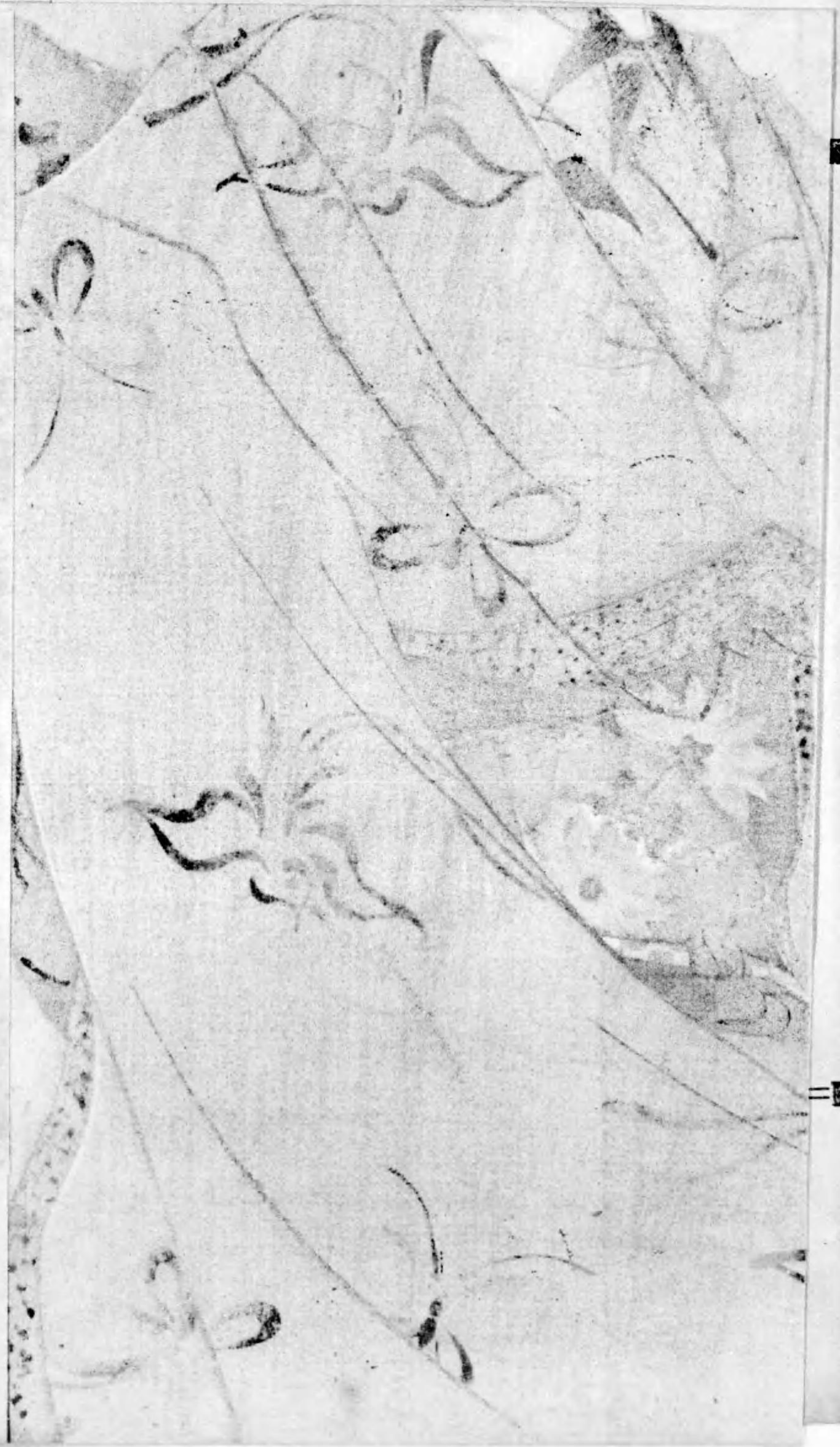
同 同 同 同 同 和 同 同 同 同 島 同 同 同 同 同 江
 君 君 君 君 君 田 君 君 君 君 川 君 君 君 君 君 見
 作 作 作 作 作 天 作 作 作 作 七 作 作 作 作 作 水
 弱 戀 静 二 儀 愛 罪 松 つ 蘭 戀 純 女 泣 探 三 大
 の 人 の 田 き 子 の の 偵 正
 き 意 の の 大 ぬ と が 馬 か ぬ の 怪 五
 氣 の の の の の の の の の の の の の の の 人
 人 地 子 女 性 関 尉 縁 吉 み 子 賊 女 娘 人 女

同 同 同 同 同 同 同 山 同 同 同 同 安 同 同 同 羽
 君 君 君 君 君 君 君 田 同 同 同 同 岡 同 同 同 儀
 作 作 作 作 作 作 作 松 琴 君 君 君 君 郷 君 君 君 荷
 人 も 浪 房 腹 迷 操 殘 飛 薄 地 宵 罪 武 電 男 命
 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江
 こ つ と ち く り 將 命 獄 像 の 士
 の 小 ひ ら
 れ 百 が ら
 合
 る 髪 音 子 ひ 路 べ 草 軍 怨 谷 畫 子 系

の大多てに上紙開新地各西東は物版出の館文隆口樋
 い白面極至もてん讀なれご付に物るたし博を評好



中
子



雲

羽 様 荷 香

(1)

日本の春始めて来る新領青島の一月元旦。
萬里皇風に靡く軒端の御旗をそのまゝ、日の丸と銘打つたホーヘンローへ街の横町
の酒場、可笑しい物の一つになつて、聽て出来る七不思議の大關はこれと妙に人
氣を吸ひ寄せた獨逸人經營の老舗は、國振りのピアを茶の如く注いで濃厚い愛嬌を
景物に出す美人嬢を始め、樽の格好に肥れた主人の老爺が、不斷のお正月面に其繁

昌も知られる、今のところ血を流した日本よりはこれが一番の成功者なんぞと取沙汰されるのであるが、威厳い軍政の檻の裡に紅一點の花を開き、事業を見つげに喘ぐ浪人共や銃剣に肩を凝らせた軍人さん達の爲にはまことに程度の好い鬱散場であつた。

廣い土間に並んだ粗末な卓子を取圍んで、風變りの屠蘇に酔ふお客様はモウ三組四組もあつた、麥酒の泡に浮く興もいと春めいて、蒸が如く暖むる湯管の加減に、大杯小杯の響き鶯の鳴く音も面白く、滿を引いて快を遣る少壯士官の顔は、過る日激戦に火の線を突破した、その面影を宛らに酒戦今や酣である。

重い扉が外から開いて招かぬに入る新來の客を、それと見ると樽爺と美人が活潑に挟み撃ちの体、手に持った紙の小旗は日の丸の威力の好いのを、バラ／＼と高く振つて『おめれたう』と叫んだもの、是が馬鹿に今日のお客人の氣に叶ふて、其度に起る歡呼は洋風かぶれた支那家屋の、可りな廣い建物を動かすやうな賑ひである。

『オイあの圖を献じたぢやないか』

『豪いのみ、商上手だが日本人には出來ぬ事だね』

『誰が馬鹿な？、媚を敵人に賣る醜奴其面に睡すべき奴ぢや』

『はッは、江藤の初憤怒か、何うか今年も君が得意の氣焰萬歳を祈るぞ』

『氣焰なら萬丈だらうは、併し乃公はあの老爺の面よりは一方金髪美人の頬に一寸無心があるのだが、彼女あの態度なら敢て接觸ぐらゐ拒みはすまいな』

『痴呆けた事を云ふな』
と矢庭に長劍の鐙を當る。

『コラ止せツ痛いぢないか』

『弱い事を云ふな、臺東鎮の東砲臺で一度落した命ぢやないか……考へて見るとお互に斯うして新占領地で春を迎へやうとは全く夢の様だなア』

歡樂の底に悲哀が籠る、血に塗れた劍がチャラ／＼と鳴る。

『左様さなア、島田大隊の六中隊が鐵條網の前で半數滅られた時には乃公達の方も酷かつたな。ピユウと來る彈丸が斯う顔を押へ付ける様で、倒れるやうにしても前』

進が出来なかつたけ』

『面を向けんやうも無しさ、それを何うして砲壘まで突進したか、何うしてあの彈丸が身軀を外れたか、不思議の命といふのはお互ひが持合せた命の事だね、はッ、』

『だから随分大切に珍重すべしピアの屠蘇でもつて大に英氣を養ふべし、や、肉が冷めなくなつたせ、オイ老爺さん、内地に居れば重詰の御馳走に飽いて蛤の汁でもつて熱爛淋漓たる奴を傾ける頃だ、熱い焼肉でも持つてお出で、焼肉だ、焼肉だ』
と卓子を叩く、此時又ぞろ扉に音して勢ひ猛に颯と開けば、勇しい軍人調子の、凡そ七八人の一隊なる青年將校が。

『龍岡中尉萬歳……』

とドツと上げたる歡びの聲、東風の如く陽氣に室に漲り、劍と靴との響き騒がしく、満面雪白の縋帶したる一人の身長高き中尉姿の中に取圍んで、ドヤドヤと入つて來た、主爺と娘の『おめれたう』も壓し潰されて打振る小旗のみ初日影と鮮かに

揺ぐ。

(111)

『ヤ龍岡中尉だ』

『オ、龍岡中尉だ』

言合はしたやうに驚きの聲は先客なる軍人達の口々を漏れた、そしてガチャ／＼と腰の物を鳴らして一同が此珍客を歓迎すべく杯を置いて起上つた時中尉を取巻いた人々は早くも室の中央なる大卓子を占領して其處に大圓陣を作り盛んに酒よ肉よと喚いた。

實に中尉龍岡敬三が生きて再び其同僚に見ることは、復活の奇蹟にも類するほど誰人をも驚かせたのである、彼はすでに一度戦死者の中に其名を連ねたのであつた、時は青景總攻撃の最終日、即ち陷落當日の朝の事である、全滅小隊の武名を轟

かせた某聯隊の部隊に属した彼は、難所の間に高き海岸堡壘の突撃に真先かけて任務を盡し、身を肉弾と抛ちて部下の士氣を激勵し、その爲に要害無双の突角に蜂の巢の如く構へた機關銃の前に全隊露出の慘劇を演じつゝも、遂に強行奮戦を遂げて堡壘乗取りの偉勳を奏した、其時である、阿修羅の如く荒れたる彼は全身數ヶ所に痛ましい傷を負ひ、滴る血汐に濡るゝ軍服重く、祖先傳來の銘刀を杖ついて敵壘に這ひ上る、左手に捧げた日章旗を打振り、萬歳を三唱する此時遅し、敵にも殊勝の兵士あつて物蔭より狙撃の二發、中尉の喉元を貫きて其儘絶息、と思ひきや、左の耳より頬にかけ眞紅の糸をかけたる如き凄じの深傷に屈せず、汝れと叫びさま飛込んで唐竹割の腕の涯に、ワツと腰を抜かした殘兵は其儘居縮みて降参、天晴れな殊勳ぞと聯隊長自ら介抱の膝に打もたれ、あはれ中尉は昏々として深い眠りに落ちて了つた、綑帶所より病院へと送らるゝ彼にはモウ一點の生氣も無かつた、空しく横はる屍に丈夫の本懐は知らるゝ苦悶の微塵犯さぬ姿宛らに軍神ぞと醫務を司ぐる人々も一種崇高の威に打たれたといふ。

「あゝ惜しい青年將校を殺した」

「氣概も稀だがあの學問が惜しい」

「天文上の智識は隊の寶と云はれた男だつた」

「今は世に在さぬ某宮殿下に仕へ申して、其思召になる筑波山頂の特設氣象觀測所に立籠り、前人未發の雲の研究に従事し、其處で得た智識を軍隊に普及さすべく努めた功績は戦死以上に偉大なものであつたに」

と寄ると觸ると中尉の戦死を傷み悲しむ聲ばかりであつた、其龍岡中尉が醫療功を奏して惜しまるゝ命を取止め、今日元旦に病院を退いて、まだ綑帶の儘ながら人々に推せられて新春を迎ふ祝ひの酒場に姿を現はさうとは實に思ひもかけぬ事であつた。

「おめでたう」

「おめでたう」

の諸聲に動搖をつくつて中尉の身邊をめぐる、祝ひの酒杯は高く差上げられて、

僅に右の眼の自由を得たると、低く物云ふだけなるに重態の名残十分なるを、強て押し包んで快澗の笑ひを絶たぬ中尉の面に、春與そゝろに到る香りの強い酒の香は頻りに打觸かつた。

(三)

「オイ龍岡、無理をして身体に障りはしなかつたかね」

「ナニ大丈夫、何うもありはしないよ安心して呉れたまへ」

振願いて應へたのは龍岡中尉である、夜氣静なる天津街の大通を、七分の酒興に踏み靴音も高く、長剣を足に纏らせながら後から急いだのは敬三が莫逆の友で、同じ中尉の職にある島御堀であつた。

此頃多い主を失ふた犬の遠吠に。漸次に更けて行く新占領地の夜は凄い、晝間は凱旋間際の見物に列をつくるカーキ服や、空家を探し歩く商人の往來で可なり賑か

な大通も、動く影は唯二つ、外れ弾丸喰つたホテルの大神計の病葉のやうに硝子板をビタ／＼風に乗せて居る音が、デードリツヒ山の頂邊の自然石に刻まれたカイゼル陛下の詩の亡魂、夜々迷ひ出て開城を口惜しがる聲かとも、種々な事の思はれて獨り歩くには無氣味な町の荒涼たる光景である。

「寒くは無いか、感冒を引いちや大變だせ、軍醫がそれを繰返して云つたつけ」
友思ひの聲で覗き込む。

「僕は外套を着てるから熱い位だ、君は可いかね酔覺めは遣られるせ」

「はッは、御病人に心配はかけないさ、矢鱈に倒してやつた大瓶が今頃腹中で示威運動を起して居る所だ、この眞向に衝突する風の味が何共云へないね、惜しい事には此趣味を君が解し得ないのが残念だ」

島中尉は酒にも金鷄章の勇者である。

「併し迷惑だつたらう、斯なに長くなるとは豫期しなかつたよ、何しろ彼の豪傑連が居合せたから事が大きくなつたのさ、稻垣の奴め自分の事のやうにして騒ぎやが

る、丸山と来ちやア殆んど狂熱だ、絶わす君に抱きつく様にして、涙を流して喜んで居たせ、嬉しい連中さ」

「僕は感謝するよ」

と曰つた龍岡中尉の聲は震わて居た。

「僕如き者を諸君が念頭に置いて呉れて、如彼して歓迎して貰ふのは實に嬉しい、僕はあの酒の匂ひの中で何邊か涙を拭いたか知れない、それに君の厚誼だ……」

「オイ、龍岡、そんなメソクした言は止せよ、可ん、可ん、軍人に女らしい事は禁物だからな」

フーと酔ひを空に吹いて。

「何うも些と怪しいぞ、命は助かつたが以前の怪瀾な氣象を病院の臥床へ置忘れて来やせんかね、なア龍岡、確り爲て呉れ、君の様な秀才があれ程の重傷から助かつて無事だつたのを誰が喜ばぬ奴が有るものか、實際聯隊長殿の御心配といふものは大したものだつたせ、だから此間病院の報告を提げて僕が行つた時に、あの沈着な

將軍が周章る様にして喜ばれた狀は全く君に見せたかつたよ……これからだ、お互ひに御奉公始め實戦も経験したし、自分を盡すのはこれからだからな、實に愉快ぢやア無いか、それに君は今度の偉功で叙勳は知れて居る……凱旋すればスグ眞島の令嬢喬子さんと結婚する事になつて居る、春風春水一時に到るといふものぢやないか、確かりしろ確かり、そして早く以前の快瀾な軍人に爲つて呉れ」

霜の大地を長劍に突鳴らし、勇みあれよと染々と云つて勵ます、友の精神は臆膺まで透いて尊いが、何故か敬三は穴に落ちて行く寂寞の、強々と我を襲ふのに堪へ切れぬ心持がした。

(四)

兎もすれば沈黙に落ちて、唯獨り行く人のやうに、時折は左も術なさ相な太息をさへ漏らす友の顔を、島中尉は氣遣はしげに覗き込んで。

「急に気分でも悪くなつたのぢや無いか、傷が痛み出したのぢやあるまいね、些と無理は無理だつたかな、今日退院の歸路を酒場に連れ出さうと云ふのだから……併し彼の連中騎虎の勢ひでもつて君を推したもだから……」

致命の重態と軍醫も幾度か手術の刀を投げかけた左しもの負傷が癒えて、今日總督府病院を退き、島中尉と共に住む娘子街なる支那人の下宿へ一應引取らうとする途中を、日は目出度い元旦なり。それと聞いた血氣の青年將校達病院の門前に中尉を待構へ、用意の自動車で酒場に連れ込み、全快祝ひやら屠蘇の宴やらを兼ね、半日を酒戦に潰して了つたのである、退院とは云へまだ顔の繃帯も取れず醫師の手を離れるは數週の後と云ふ容態であるから、萬事を世話して健氣しく骨肉も及ばる友情を盡す島中尉が附添人の格で、傍を去らずに注意はしたのであるが、生きて酌み交さうとは思はなかつた此新歳の祝杯は、實に勇士の臟腑を剗る味があつた、萬歳々々と數を重ね、元より飲ける口の島中尉も大分の酔ひを貪つた、で斯うして一絡に宿に歸る途中、性質の快濶な氣象に快い酒の興も加はつて、舌端面白く病の友を

慰めつ勵ましつするのであるが、肝腎の敬三には一向にそれを應けて喜ぶ風情も見なかつた。

其實、以前の氣象は病院の臥床へ置忘れて來たぢやないか、と皮肉を云つて早く快濶な軍人に爲つて呉れど、眞心籠る友の聲を、敬三は深く濃かく胸裡に刻ながら一步毎に物思ひに沈むのである、それを左様とは島中尉には合點されなかつた、病勢が募つたのではないかと、酔ひから一時に覺めたやうな聲で氣遣ふのを、とある曲り角の辻に佇止つて、敬三は潰瀨なげな眼光で改まつた形に凝と振願いた。

「オイ何うした、何うした、悪いのか痛み出したか」

「イヤ氣遣ふて呉れたまふな、そんな事はありはしない……けれど君、君は僕を思つて左様云つて呉れるのは實に嬉しいが、僕は……僕は、僕はモウ不具者になつて了つたよ」

鋭い聲で大きく不具者と云つた、敬三の全身はブル／＼と震へた。

「君と學校以來の理想も、彼の砲壘で狙撃れた彈丸で剗かれた片頬の肉と共に、モ

ウ影も形も無く何處かへケシ飛んで了つた。僕は凱旋と共に廢兵の群に落ちて、君達とは永遠に別れなければならん、斯んな醜い不具の軍人……」

「オイ、オイ、君何を云ふか、顔の傷は一時致命傷と危まれたのが奇麗に癒わる、軍醫の話ではモウ二週間も経つたら其の繃帯も除られるといふ……」

「イヤ」

と敬三は劇しく打消すやうに云つた。

「繃帯は除れても剝れた肉は着かぬ君はまだ此傷を能く見たことあるまい、耳から下顎にかけて深く這ふた三寸の傷痕は、正面に見せたら、有ゆる險惡の相貌を一つに集めた劣等動物の面を其儘なのに、君だつて愛想を盡かすだらう、そればかりぢやない、僕はこの傷の爲に左の耳の聴覺は全然失ふた、それから左の方の齒は一本も残らず……」

聲は怫々と、底知れぬ憤悶を泣くが如く怨むが如く、人の肺腑を掴み潰す様に響いた。

(五)

底冷のする霜の夜、酒の氣も大方醒めかけた島御堀は、今敬三が云つた詞に何とはなし凄惨な感に打たれ、全身氷を浴びたやうな心持がして、思はず其處に立すくんだ、敬三も石像の如く突立つて動かない。

「……併し君僕の云ふ事を誤解して呉れたまふな、僕は決して君國に捧げた此身命を惜しむものではない、一死國に報ゆる軍人の本分を忘ればしない……唯その軍人として立つ事がモウ出来なくなつたのが残念なのだ、これから理想通りの事業に突き進むあの健康な同僚達の運命が羨ましいのだ、君とも別れなければならぬのが悲しいのだ……」

「イヤ君、一寸待つて呉れ、それは少し君の云ふ事が矛盾してやせんか、ナル程其

傷の爲に退役になるとも、或は軍籍を離れるともだ、それは所謂功成り名遂げて立派に、責を盡したものでやないか、君が今度の偉勳は誰だつて認めぬ者はない、不日論功行賞の曉には君の名は忽ち世間に轟くちやないか、今日の様にして皆が歡迎するものも君の回復を喜ぶと共に、一つはめでたい武運に肖りたい爲に如彼して寄つて群つて騒ぐのだけ、僕だつて君の功名が實際羨ましいよ、それに何ごいふ悲觀をするのか、君國に捧げた身命と云ふ事を忘れなかつたらそんな愚痴は出ぬ筈ぢや、矛盾した事を云つては可けない、ね、左様だらう、そんな理解の判らぬ君ぢや無かつたが』

と云つて御堀は眞面目だつた顔を急に崩した。

『はッはッはッ、これは君のいふ言ぢや無い、屹度病氣の所爲だ、まだ癒り切らぬ衰弱が云はせるのだ、あの臭い病院の藥が云はせるのだ』

と例の調子で相手の沈む心を浮き立たせやうとした、強い嚴い髯面に女のやうな優情を漾はせて、僅に一人の心の友を慰めやうとする御堀の態度は、美しい精神一

ばいの發揮である。

『斯な所で愚圖々々しちやア可ん、行かう、下宿に歸つて幾らでも話せるぢやないか、風邪でも引いて病勢が後戻りをする、いよゝんな事が云ひたくなる鶴龜々々確かり頭巾を冠りたまへ、霜が下りてるやうだ』

其手を取つて引張らんばかりに、モウ五六丁前方の下宿へ急がし立る、敬三はまだ何か云ひたいのを、云はせる御堀に、黙つて隨いて歩いた。

寒い風が一陣、路傍の枯柳を吹き、ツイ舊臘から黠り出した其處の十字街の孤光燈が、線に故障のあるのか暗くなつたり、明るくなつたり、兩人の影はちら／＼と仲好く纏れて彼方へ遠ざかる時、風か、あらず怪しい音は暗い軒下を微に傳はつて其處にヌツと現はれた黒い人影、キラリと光る物を腰邊から取出して、右の手に高く構へた狙撃の姿勢、柳の木の下闇を飛ぶが如くに縫ふて、中尉兩人をスタ／＼と迫ふた。

宵に獨逸人の酒場に居て、密に兩中尉の様子に目をつけ、後を随けた支那人であ

(六)

忽ち一發の銃聲で深夜の寂寞を破つた魔の如く兩人の軍人を隨けた支那人は的の定まる距離まで思ふ存分近づいて拳銃の火蓋を切つたのである、狙はれたのは敬三か御堀か。

『ワッ』

と云つて踏めいたのは敬三、早速に身を屈めて不意に敵に構へた御堀は『汝』と獅子の吠ゆる様な聲で三間後方なる黒い影を目がけて飛び込んだ、帯刀がガチャ／＼なつて、其處に激しい格闘が始まつた。

『オイ龍岡、怪我は無いか我怪は、大丈夫か』

と曲者と揉み合ひながら御堀は叫ぶ、暫時して敬三は應へた。

『ア、何處も何うも無い、腰を射られたと思つたが外れたやうだ、君怪我をして呉れるな』

とバタ／＼と駆けつける。

『何有、這な奴が何匹來たつて』

御堀は得意の柔道で相手の襟を締めたらしい、苦し相に咳き入る聲。

『支那人だ此奴ア、生意氣な事をしやがるッ』

ポカリ／＼と殿り飛ばす音。

『龍岡、其邊に銃を落したから拾ふて呉れ、可いよ／＼大丈夫だ、病人は見物するさ、宿への土産に生捕にしやる』

確と取つて押へ、跳反さうとするのに巖の如く跨つた。

『この野郎何の爲に戯けた眞似をするんだ、日本の軍人を見違へたか、サア立たんかッ』

右腕を後に捻ち上げ、グツと力を入れるのに曲者は堪らさず。

「痛いッ」

と始めて叫んだ。

「ヤ日本語を……」

「日本人らしいよ、髪は鬘だ、そら」

と敬三は傍に落ち散った辨髪のかつ付いた帽子を拾ひ上げた。

「ウム日本人らしい、此奴ッ」

引起さうとしたのをモ一度抛るやうに地に押し倒して。

「變装して居るのだな、道理で變だと思つた、日本人とあればイヨク許されん奴

ぢや、面を見せろッ」

髪引搦んで明るい方へ向けやうとする時、キラリと光る白い刃物、曲者は顔見ら

れまじと死物狂ひに、下からサツと御堀を刺した、それを電光の如く体を交して。

「止せッ、そんな物が我々に立つと思ふかッ」

叩き落さんと振上げる、鐵拳の下を鳥よりも早く。

「何をしやがるんでい」

一生懸命の力は鋭く、サツと突きかけて軒下の闇へ飛び込んだ」

「奴ッ待て」

續いて追はんとするのを敬三は押し制める。

「君モウ可いぢやないか、如彼な奴ア何をするか知れん、幸ひに負傷が無かつかた

ら、モウ止して呉れたまへ、千金の身体ぢやないか」

「畜生ッ、一寸の油断に逃げやがつた、忌々しい野郎だ」

と御堀は追ふも及ぶまじき彼方の廣い闇を睨んで突つ立つた。

(七)

下宿の一室に閉ち籠つて負傷の癒ゆるを待つ龍岡中尉には、心の友の島御堀も居る、隊の方からは行届いた手當を受ける、日本に居ると些しの變りもない安樂な境

遇に、暢氣に凱旋の日の來るのを樂しみ、身軀に障らぬ様に起臥を爲て居れば可いのであるが、致命とさへ氣遣はれた大負傷の所爲か、但しは腦に異狀でもあるのか彼は島中尉の云ふ如く、實に前とは別人の様に、快々として樂しまぬ氣勢をのみ見せて窓の戸さへ閉ぢがちに、白晝を夜と陰氣に暮して居るのである。

島中尉はモウ凱旋引上げに間も無い忙しい軍務に、朝早く夜は遅い勤務の傍ら、眞心を傾けて友の介抱に盡すのぢあつた、恰度退院後一週間目の朝、昨夜は當直で不在だつた御堀は隊から歸つて來ると、例時よりも活潑にサツサと敬三の居間へ入つて來た、そして相變らず寢臺の上へ、作りつけられた木像のやうに、勢も張合ひも無い姿態で横臥になつて居る友の枕元へ、逼るが如く突立つて。

「オイ〜また眼を明けて夢を見て居るのだな、サア起きたく〜、今日を何と思つて居るのだ」

「歸つたね」

と左も煩惱に云つて、敬三は半身を起した、縋帶はまだ其儘に、血色は青白い。

「歸つたさ、急いで歸つて來たのだ、君と兩人で七草の粥を喫べやうと思つて」

「七草？ウム七日か……ウム七日になつたかねね」

キョトンとした敬三の顔を眺めて、御堀はそこらの物を吹飛ばすやうに笑つた。

「はッは、山の中曆日なしと云ふ顔ぢや、七日正月さ、今日は當直明けで一日家に居るから大いに談じよう、今我輩の考案になる新七草の粥を命じて置いたからねそれが出來たら暖まりながら話さう、ね、左様しやう、朝飯はまだだらう」

「些ども欲しくないから……昨夜も喰はずに寝た……」

「喰はずに？、飯をかい」

と疑と見て。

「困るね君は……何故そんなに自暴自棄に類した事をするのだね、僕があれ程云つてるのに、そんな事をして今が衰弱の回復期で一番大切なのに、萬一身體に障つたら何するのだ」

まだ軍服も脱がず、取敢へず此室に入つた御堀は、立つて居たがのドカリと傍へ

の椅子に倚つて。

「後から云はうと思つたのだが、我々の凱旋期日も略決つたせ、それで其日迄には君の身體も船に乗つて差支の無い様にしなければと云ふので、軍醫の方でも大變骨を折つて居るのだけ、それに肝腎の君は……」

「それは解つて居るよ、昨日の診断で明日あたりに繃帯を除らうかと云つて居たから」

「それ見たまへ、退院當時には二週間後でなくてはと云つた繃帯が、其半で除れる位に快くなつて居るのに、君は反對に故意と不攝生な事をするよと云ふがあるか」

敬三は重さうに頭を押へて、そして悲痛に封ぢた聲で云つた。

「だつて……だつて君、僕は負傷よりも深い病患に犯されて居るものを、イヤ此負傷が原因で今は軍醫の手の届かぬ精神上の病氣に罹つて居る……」

「待つた、待つた、それなら今日は當方から大に聞きたいのだ、軍服を脱いで來るから待つて呉れ、七草の粥も其の内には出来る、縁起の善い七草の粥は或は君の情

神の病を癒すかも知れんからな、は、は、は」

御堀が己が部屋へへ行つた後、敬三は枕の下に入れた分の厚い一通の手紙を取り出し、モウ二三度繰返されたらしい女文字の巻紙を、其一字づゝを拾ふやうに口の中で靜かに讀み下しつゝ、無意識の狀に寢臺を離れて、明るい窓の下に置かれた籐椅子へ腰をかけた、軒に掲げられた入城式から其儘の日章旗を吹くとしもない風が動かし、微々と部屋に入つて長い手紙をダラリと膝から落す、喬子より、愛する敬三様へと結ばれた太文字は床に觸れて。

(八)

繰り返して讀まるゝ女文字の手紙、其手紙には文字より外の目に見ぬ大きな威力が籠るらしく、敬三は精神も身體も薄い紙に引付けられたやうに、凝と眼を据ゑて、一字一句を今更の如く讀み行くのである。

「……ですから妾本統に嬉しいのよ兩人の上に照り輝く幸運の日月の光り、其榮ある光りの眩しさ明るさが今から想像されるぢやありませんか、ね左様でせう、妾今此手紙を西洋館の三階の東窓の下で認めて居るのよ、松の葉越しに鋭い朝日の光りが大理石の卓子に落ちて、墨汁の色の花のやうに目を射るんだもの、妾その中で貴郎へ上げる手紙を書くのだから、染々と自分の幸福を感じずには居られないわ、そして斯な事を思つて居るのよ、それはね、あの貴郎が今度の勳功で頂く金蓮勳章ね、あの名譽の表象の光りが恰度此朝の眩しい朝日影の様に妾の目を射る時妾は其時が心からの歡喜を何のやうに表情したら貴郎に満足を得らるるかと思つて、モウ嬉しい苦勞が一ばいですもの、妾その時は……ほほほ、貴郎笑つては厭よ……突然光り輝く軍服の胸に取絶つて、そして此室に掲つた西條畫伯の油繪の騎士の凱旋の勇ましい姿の様な凛々しいお顔が山東の日に焼けて、強い勇氣の充ち溢れた軍人色になつて、お聲までが戰場の名残を其儘に……喬子！喬子さんと、ほほほ、だつて妾のこの憧れを貴郎は察して下さるわね……」

敬三は瞬きもしないで此處まで默讀だ、そして詰た息を一時に吐くやうにホツと云ふて天井を仰いだ。

「凛々しい顔……凛々しい顔……騎士の凱旋のやうな勇ましい姿……」
 暫時すると、目を閉じて仰向いて居た敬三は斯く獨語を云つて急に椅子を離れた手紙を握つた手には細かな震ひが見える、物に怯びわたやうな目で室内を見廻しながら、寢臺へ就くでもなく三步四歩と足を入口の方へ運ぶ、遙かの勝手元で、可笑しな調子に庖丁で粗板を叩く音が起つた、御堀が宿の主人の飄輕者張公といふのを弄り半分、齊七草と囃し立てるのだらう。

敬三は手紙を巻いて以前の枕の下に納め、兩手で縋帯をした頭を押へてフラ／＼と巳が部屋を出た、そして廊下傳ひに浴室の隣の室の前まで來ると、人の居ぬ様子を見定めて衝と中に入り壁に掲つた大姿見の前へ早足で近づいた、以前は可なり大きな旅館だつたのが、戦争の經營者が逃げた後を利に敏い支那人が借受けて、日本人向きの下宿やら間貸しをして居るのであるが、まだ客は少く、大きな建物は寂寥

として寺院のやうな静けさである。

餘り人の入らぬ部屋の空気の冷たい中に、白い光りを投げる鏡の面は寒い、唐めいた彫刻で飾つて、化粧道具の小抽斗がついた箆筒も其下に置かれてある、敬三は鏡に向つてそろ／＼と繻帯を除りかけた。

(九)

二巻に餘る繻帯が万字に絡んで面を押へ、頭上を壓して確と結ばれた其結び目を解きにかゝつた敬三の手はわなわな震へて居る、そして蒼白い血色はクル／＼肩を這ふて床上に垂れる繻帯の嵩の増すと共に、漸次に生氣を失ふて、ブンと劇しい藥の香が濛び、脱脂綿の載つた左方の頬が、瘦せた肉に毒彈の傷痕酷たらしく、忽ち満面の相貌を變へて、鏡の面に鮮明と映つた時には、後に椅子が無かつたら彼は其儘床に昏倒するのだつたらう、僅に身を支へて再び伸び上り、我に逼る顔を見るや

うな眼光で、恐ろしいものに凝と鏡裡を眺めた。

實に痛ましの戦闘の名残よ、今は世に亡き父の面影に寸分違はず、凛々しい目鼻立は母親が自慢の丹誠の的であつた、同窓でも美男の聞ね高い男らしい姿は勇みある軍服が能く相應つて道にすれ違ふ人も此青年將校を顧向かぬは無かつた、で今度の出征には祖先傳來の銘刀を帶し、新調の軍裝晴々しく金甲に名香を籠めた昔の勇士が出陣も斯くやと、門出を送る親戚知友は今更のやうに其姿容に見惚れたのであつた中にも彼と結婚の約束がある富豪眞島家の令嬢喬子は、女子大學の秀才と噂され、新教育を受けた女だけに相思の仲を裂く出征の憂き別れに、女々しい舉動こそ見せなかつたが、纏綿たる情思を濃かに通はせて、君死に給ふことなかれを、歌ひを兼まじき露はの戀情を語つた、女の手づから色紅なる花の一枝を、軍服の胸に挿て、さらばと堅く手を握つた、停車場での美男美女の別れは詩を繪にしたやうに美しくかつた。

斯も容貌の優れて美しくかつただけに無残にその面を射て耳から頰に這ふた彈丸

の創痕は、名書を塗すつた墨一抔、危く咽喉に入らうとした弾を抜くため縦横に切開した肉は花片の如く外面に盛り、其儘に癒れた色の毒々しさ、眞に二目と見られぬ醜い状であつた。

有らゆる險惡の相貌を一つに集めた劣等動物の面を其儘と、我顔を憎しみ呪ふ敬三は、今日始めて人なき一室の大妻見の前に立つて思ふがまゝに傷を眺めた、そして今までよりも一層深い絶望の淵に心を墜して、殆ど失神せんばかりに其處の卓へドウと倚りかゝり兩手で膝と頭を押へ、苦しい唸き聲を立てるのであつた。

盡忠報國の赤心を發揮して、一たび死地に突き進んで身を顧なかつた敬三も、不思議の命生存へて斯の生の歡樂を覺ゆる時、戀に狂ふ平凡の人と爲つて醜い顔に悶れた、此創傷の爲に喬子との戀の破壊を恐れるのである。

御堀は敬三を探して此室に入り、普通ならぬ光景に驚いて目を睜つた。

四軒路次の中は鍵の手になつて、突當りが巡查某の住宅、其隣家の些やかな格子戸の上には水野芳枝と女名前らしい標札が掛る、二棟づゝ別に建られた粗材な借家普請ながら、雨の日も下駄の汚れぬ煉瓦敷の出入道を、當番の札が廻つて奇麗に掃除をする、二軒は會社員と新聞社の書工であるが、打揃ふて平和な生活の人々らしく、高い聲も騒がぬ静に品の善い裏住ひである。

静かな路次に相應しい、濃かな三絃に合せた京歌が能く聞ゆる、昔檢校の位を戴きに都へ上る盲法師が、祈誓を籠める神前で、潔齋をして秘曲を調べたといふ、あの法師唄の文句は美しい、霞や雪と風懷を寄せた、某の公卿やら聞けた儒者の氣まぐれの作歌が其儘に傳はつて、三味線が僅た一つの邦樂ながら、卑猥の難癖つけられて家庭から逐はるゝ今の世に、一縷の命を保つ此歌の功績は豪いそれ、が此頃東

京にも流行つて、彼方此方に京阪輸入のお師匠が増ねた、此處の奥の水野芳枝の許へも七八人のお弟子が通ふて、一しきり狭い士間に華奢の履物が並んだのであるが師匠の芳枝といふモウ五十に近い老女は去年の暮から病氣に罹つて枕に就いて居るので、稽古三味線の音もピツタリ止み、折角お正月の樂みとしたものをと、昔好きの巡査の老母を落膽させた。

灰色がついた障子に黒く汚れた疊、天井も低く壁も煤けた四疊半の一室に、芳枝は感冒の熱で重々しう寢て居る、それでも其邊は奇麗に取片附けられて斯な家に能く見る取亂した大世話場の光景は絶えて無い、枕屏風の外には娘の花枝が今の前醫者から持つて歸つた藥を進める支度にかゝつて居る、十八九の花の盛りを破世帯の苦勞を埋めて何時を春とも世間に遠い味氣な日暮しながら、親ひとり子ひとりに恩愛の情は餘所の見る目も羨ましい程仲の睦じい親娘である、持つて生れた容色は襦袢に包んでも光る名玉のやうに、黒ずんだ四邊のさまと離れて際立つて注意を惹く、瓜實顔の白い頬に又しても煩く下る後れ毛を押へながら、藥の湯を冷して盆を

片手に屏風を覗いた。

『お母様、目が覺めて居て？』

『はあ、ウト／＼した様だつたけれど……お前モウお醫者から歸つて來たの』

『一寸前に歸りました、スグ此藥を服む様に仰有つたのですけれど、餘り能く寢んで居らつしやるから』

『左様、では寢られたのね、些とも知らなんだもの』

と起上る、寢れて血色の鈍い顔に櫛卷の髪がバラ／＼とかゝる、花枝をその儘年を取らした面貌である。

『寢らるれば可いよ、寢らるゝ度に熱が下ると仰有つたから、嬉しいわね漸次快くなる方だから』

慰めながら背中に寄添ふて、そつと髪を掻き上げて置き、熱冷しらしい藥を服ませる。

『苦いでせう、それ、これをお嗅り、これなら毒にはなりませんから』

竹揚子の先にクル／＼と、瓶から巻取った水飴を、子供に與るやうに、黄金色の塊を透して見せて喜ばせる。

「薬受けならモウ可いのに、又それを買つて來たのね、お前がそんなに爲てお呉れだど、お母さんは反つて」

「ほ、ほ、ほ、飴が垂つて了ふぢやありませんか、早くお喫べなさいよ」

「まあ良い飴らしいね、滋養になるだらうね」

と口に持つて行く、甘い飴よりも優しい娘の孝行が老の身に染々と。

(111)

「起きて居て可いの」

「能く眠られた所爲だらうね、大變氣分が好い様だから暫時斯うして居ませう」

と母は寢床の上に坐り直した、花枝は後から薄團を寄せかける。

「モウ今日は十五日ね」

「はあ、外は賑かよ、お天氣が好いものだから」

「左様だらうね、寂しいお正月だつたけれど、今日でお仕舞と思ふと何だか名残り惜いやうな氣るがすわね」

と芳枝は何か考へながら娘の姿を凝と眺める。

「お母さん何ですよ、そんなに妾を見て」

「お前その衣服でお醫者へ行つたの」

「わ」

と云つたが花枝は我姿を見るやうに俯向いて黙つた。

「お祝ひ日といふにそんな風をして町を……」

芳枝は斯う云ひかけたが其顔には分明と心の苦痛が現はれ、詞の末は微に慄へて居た、花枝は忽ち輕う笑うて。

「ほ、ほ、お母さん何ですよ又そんな要らぬ憂慮を始めて。これで結構ですわ

垢が着いてさへ居なければ何處へ出たつて大威張よ、何うあるものですか』
 『……だつてお正月の大紋目といふに、お前の妙齡でそんな服装をして外を歩く者もあるまいぢやないか……』

と母親の肩の邊り、暗く曇つて今にも涙の堰が切れさう、それを制へるやうに。
 『そんな事があるものですか、廣い土地だけに風装だつて種々だわ、妾よりかモ一
 つ酷いのを幾らも見掛けるんだもの、お母さん』

詞を改めて花枝は母に對つた。

『モウ／＼そんな……妾の事なんか決して心配しないで、精神を悠然ともつて養生
 をして下さいよ、そんな事よか妾お母さんの病氣が早く癒らないよ』

『妾のはモウ癒るに決つて居ます、こんなに氣分が快くなつたから、決して心配し
 てお呉れでないよ』

と親思ひの慰め詞にツイ約りこまれて笑顔になつたが、垢こそ見ね木綿の洗ひ
 晒しに、縷子とは名のみ糸の抜けた帯を結んで、胸から腰の邊り老人のやうに物淋

しう、頭には手束ねの蝶々髻が器用に出来たのもイツソ母を泣かせる種である。

『今日でモウお稽古を三月から休むのね、皆さんが嘸怒つて居らつしやるだらう
 それに此方も收入の物はピツタリ止まつたし、妾の藥代といふものが要らいでもお
 金に詰る年の瀬を、お前ひとり苦勞させてお母さんは本統に氣の毒に思ひます』

『あれ又そんな話を？お母さんに神經ね、病氣の所爲だわ、苦勞ツて妾些ども辛い
 ことも何も無いんだもの今年に不景氣だからお正月着のお裁縫は無いだらうと思つ
 てたのがあんなに多數入つて来たでせう、幸福でしたわね、それに常日のと違つて
 縫賃も一割は増して貰へるのでからお母さんが体んで居ても些ども困りは爲ませ
 んわ、此調子なら春になつても仕事は忙しいだらうと思ひますだから世帯の事なん
 か氣にかけないで居て下さいよ、憂慮したら薬も何も利きせんから』

『……有難う……お前がそんなに優しくしてお呉れなので、お母さんは何よりも嬉
 しう思ひます……それにつけても眞島へ手紙を出したのは確か十月の末だつたねわ
 歳暮には何か返事があるだらうと思つたのに……使も何も來ないのかい』

『お父様の所から？何も来ませんわ』
 と答へた花枝の聲も顔も淋しかった、障子に射して居た日影が消れると、急に家
 の中が暗くなる、冷たいやうな陰氣が襲ひかゝる、と覺てて母娘は淋しい顔を見合
 せた、柱にかけてあつた三味線がポツンと高切れして鳴つた。
 『お母さん、モウ詰らない話は止して、オ、今年は弾初めも未だでしたわね、お母
 さん氣分が快ければあの小夜神樂の扇づくしの所を云つて下さいな、妾お母さんの
 代りに弾初めをしませうね』
 と立上る。

(111)

……人目忍ぶやこよひ扇のかなめの契り、手をくるくると日でり傘、かざすや加
 賀の扇傘 扇ぐるまや班女が圍の花扇、めぐる縁は扇の別れ、風にちらく散るか

櫻のあらし木枯……。

花枝は三味線を取つて、結ばれた母の心を慰むべく、その人の好きな京歌を低う
 唄ふた。

母の代稽古も出来る程三味の腕は確かであるから、病氣の間を是非にと弟子達の
 懇望もあつたが、未熟と卑下して彼は應じなかつた、そして一生懸命に裁縫の賃仕
 事をして生活と醫藥の代を稼いだのであるが、三月に渉る病人に不自由見せぬ骨折
 は他人の知らぬ苦勞であつた、貯へては有る筈もなく、米と藥が力一ぱいで、家
 賃や雑用の不足には、身の衣裳を二度三度、今は通帳もたす顔の利く質店の勝手も
 覺れた、それもモウ底を拂いて、大節季を越す苦しさには、繊弱い我腕を叩きつけ
 て、女に生れた腑甲斐なさを泣いたのである、母の前をつくらふて針仕事で澤山と
 云つたのも、病苦に貧苦を重ねさせまい配慮からで、一番依頼にした其大呉服店か
 らの注文物も、二十年來の不景氣と使ひの小僧が口癖も心細く、親子に纏はる悲し
 い運命の、將來の事のみ氣遣はれた身に、忽ち明日の日の糧米の問題が逼る。

花枝は斯した苦勞の中に居る、そして母には充分に行届いた手當を加はへた、醫者も病院から来て貰ひ、看護に油断なく滋養物も品を交へて進めた、その苦しい遺線する身には、世間は正月と云つて華やかに賑はふのが不思議と感ぜらるゝ位である、今日も病院へ薬取りの途中、一週間に拂ふ薬價の期限が又明後日に近づいたのに胸を轟かした彼は取つ置いつの思案、に明るい町を夜の如く歩いたのである。「些とも持たないで能く忘れずに居てだね、難かしい曲で、歌と絃とが離れて居るのだからね」

「大膽に弾けばそれでもお茶が濁せるわね」

と花枝は獨語のやうに云つて、三味線を置くど恍惚とした氣勢で居る。

「立派なものですよ、お前が皆さんの仰有るやうに妾の悪い間代つて稽古をしてお上げとだ可いけれど彼なことを云つて断つてのものだから」

「だつて妾自分に覺束ないと思ふ事を人様に教へるなんて、そんなことをしては心が濟みませんわ、お禮を貰つて間違つたものを教へたら、それこそお母さんの恥辱

になるぢやありませんか」

「お前は變人だからそんなことをお云ひだけれど、何の今の大勢のお師匠様に皆眞個の技倆があつて堪るものかね、お前ほどに達すればモウ看板を掛け兼ねのが當世ですよ」

「ほ、ほ、當世つて、お母さんも妾も當世ぢやないことよ」

と云て花枝は餘ッ程可笑しい事を云つたやうに華やかに笑つた、芳枝も誘はれて一緒に笑ふ、暫時すると、

「お母さん、妾今夜から宵の口一時間不在になつても可いの、あの裁縫を持つて来る呉服屋ね、彼家の嬢さんが三味線の手解きをして欲しいと云つて妾頼まれたのですよ、厭とも云へないでせう。手解き位ならつて承引つたのですけれど、お母さんが淋しければ……」

芳枝は突然に聞く事ながら、これも娘が生計に捧げる辛い苦勞よと、腹の中で手を合はせるやうにして快く承知した。

其宵から花枝は毎夜缺さず三味線を抱いて家を出るのであつた。

(III)

眞島浩造の名は近頃急に東京の實業家仲間にも利かせて来た、メキ／＼と増した資産の威力もあらうが、一つには今の政府の權威者たる某大臣と其郷里を同じくして居て、格別入魂の間柄である、といふことが彼の實力の五倍にも十倍にも自然と吹聴したのである。

本宅は驪河臺に宏壯な建物人目を驚かすものを構へ、商店は神田に新式石造の礎萬代の動がぬ勢ひ、鑛山事業を主に其他諸種の方面に營利の手を擴げ邸宅も店頭もいつも市の如き人の參集、に繁昌も榮華も知らるゝ新長者鑑の候補者である。

有り餘る財産と反對に浩造には子供が少かつた、兄と妹の兩人きりで、後續人の浩三郎といふのは今上海の某商館へ實務見習の爲赴いて居る、家には妻の元子と娘

喬子の兩人のみで、家庭は至つて寂しいのであるが、勢ひに集まる大勢の出入と、上と下との奉公人の數で、浩造の周圍はいつも祭の様に賑やかであつた、モウ白い物を置いた頭髮が前は薄く禿げかゝつて、額上にたゞむ深い皺には五十年の商戦の名残が見える、肥満とした顔丈な身にはまだこれからの活動を思はせ、實際朝から晩まで伸や自動車に揺られて飛び歩く元氣には若い者の舌を巻かせる、で強慾だの無慈悲だのと陰に譏る敵は随分と有つ身であるが、目の前には地を叩かんばかりの頭をのみ眺めて、人と金とを七分三分に使ひ分け、賢く鋭く世を渡る強者である。娘喬子は取つて十九の春を迎へ、女子大學に通ふて居るのであるが、校内でも秀才の聞は高く、容色は母親の佳い點ばかりを授かつて、足らぬ事もない大家の奥に黄金の花の如く咲き誇つて居る、浩造がこの喬子を愛することは又格別で、世間並を外れて甘く育てた、元より望むに叶はぬ事もなく衣裳調度は満ち溢れ、四邊の眩い姿をして交際場裡に立ち現はれる、まだ學窓に居る身分で、其友には某華族の夫人といふのが多く、金にこびる伶俐な人達に取巻れて人の目を聳てさす潜在な月日

を送つた。

喬子の居間は華美を盡した西洋館の一室で、自在に光線を探つた玻璃窓の、殊にその東向きの朝日の光りを受ける窓帷の下に彼の好みて美しい卓子は置かれた、春の草のやうな柔かい敷物を踏んで、常着にも贅を誇る華やかな室の主人が現はれる時、大理石像の女神も油繪の舞姫も共にその美を掻き消さるゝ様であつた。

今朝も東窓の下に喬子は裕に椅子に倚つた、そして松の葉越しに射る朝日の光りを派手な衣裳に受けて、静かに何かの物思ひに耽つた。

喬子の思ひは戀である、彼の魂は今遠く山東の空に飛んで、青島に居る陸軍中尉龍岡敬三の許へと通ふた、敬三と彼とは既に結婚の約が成立つて、凱旋の日は即ち婚姻の式を擧げる時である、敬三の許へと送らるゝ情思を籠めた濃かな手紙は何時も此窓の下で認められるのであつた。

(一四)

墨汁の色よりも濃い情思を美しくい文字で紙にうつす、喬子は卓子に對つて敬三の許へ送る手紙を書いて居る、朝を喜ぶ小鳥の囀りにも、戀に酔ふ乙女の心は襟ぐられる、華やかな朝日影は近く成就する希望の榮光を思はせる、觸らば一時に開かん薔薇の花香を双頬に漲らせて、ペンの先をば頬りに動かさせた。
手紙に一心不亂になつて、後に人の立つたのを知らなかつた喬子は、不意の聲に驚かされた。

『は、は、は、は、又敬三さんへの手紙ぢやな』

『キッ』

と云つて振向くと、大きな父の姿が自分に覆ひ被さるやうに其處に。

『あらお父さま』

聲も手元も周章しく、吸取紙を早速に蓋にする。

「は、は、は、は、乃公に何も隠さなくても可いちやないか、一寸見せてお呉れ」

と戯談らしく太い手をヌツと出す、喬子は甲走つた聲で卓子を身體で覆ふやうにして。

「いややお父さま、そんなことではいやよ、いやよ」

「どんな事が書いてあるか、一寸位見せても可さうなものだな」

と浩造は笑ひながら椅子にかける、その間にサツと抽斗に納めて。

「お父さま厭よ、何時もあんなことばかり、手紙といふ物は親子の間だつて……」

「解つてるよ、殊に敬三さん上げるのには大秘密かな」

「ほ、ほそれは秘密もあるわ、だからお父さまには見せられないことよ」

と強く云つて、甘へた中に抛ねて見せる、モウ一人前に戀の所置して行く、確か

りとませた娘の状を見て、浩造は喜悅に顔中の紐を解く。

「戯談さ、併し敬三さんから消息はあるかね、モウ歸る日取りを云つて來さうなも

のだが」

「凱旋が近いからでせうか、手紙は些とも來ませんわ」

「病院を出た通知はあつたね、一番殿りの引上げちやから何や彼と御用があつて遅くなるのだらうよ、今日は陸軍省へ行くから確かなところを聞いて見よう、準備は出來てるやうなもの、倍とすると手取りがあるもんだテ、日取りを確めた上でモ一度打合會を開かうよ」

「左様して下さいよ、お母さまは熱心だけれど、お父さまは何だか妾の事には冷淡の様だわ」

と怨じる娘の顔を呆れたものに眺めて。

「馬鹿な事を云ふもんぢやない、お元が衣裳係りで躍起になつてるのも、凡そ二十人からの人がお前の嫁入支度にかゝり切つてるのも悉皆この乃公がヤイ／＼云つて尻を叩くからぢや、式の日までには横濱の商館に來た新式の自動車も取寄せやうと思つてな、金儲けに忙しい中で乃公は獨り氣を揉んでるのぢや」

「自動車ッて何んなの」

と忽ち喬子の面は輝く。

「何んなッて立流な物さ、金鶏勳章帯げた敬三さんとお前の兩夫婦が乗るのよ、眞逆乃公の使ひ古した奴も用ひられまいさ、此奴に又七八千の金は要るが晴れの道具ぢやからな」

正親町の嬢さんの輿入れの時も自動車が大層評判だつたわ、奇麗だつたもの、あんなのだと可いけれど」

「まあ、黙つて乗つて戴きませう、乃公がお前の爲にする事ぢや、貧乏華旅に負は取らせぬよはははは」

「早く見たいわ、取寄せて頂戴な」

「乗り馴らして置かな、それも可からう、龍岡の隠居でも訪問して驚かすが可い」

龍岡の隠居とは敬三の母親の事である。

(一五)

出征陸軍中尉龍岡敬三の邸宅は、牛込の片ほとり閑静な土地に在つて、母親の眞佐子といふモウ六十路に近い老女に、女中一人の至つて淋しい暮しであるが、ツイ近所に住む藤吉と云つて、これは敬三の父が存生中、其郷里から東京に連れて來られた仲間格の奉公人で、今は息子が肴屋渡世をして孝行に仕へるので、生計のことに煩ひもない老の身體を、御恩報じの勤めと龍岡の邸に大方詰め切つて、老いていよく顔丈なのを誇り、何や彼と眞佐子の相談相手になる昔氣質の男、この藤吉と共に三人の留守居で、武勳中尉の凱旋を今日か明日かと待ち遠しく暮して居るのである。

日當りのよい南の椽は近く、眞佐子は茶の間の端に出て手文庫の掃除をして居る藤吉は椽に腰を掛け、話の間には好きな蓑をスバくと吹かす、煙は長閑に庭の梅

ケ杖に消ねる。

「御隠居様、何を探して居らつしやるだ」

「何といふ事もないけれどね、餘り亂れて居るから片づけやうと思つて。それに敬

三の小さな時の守り袋があつたやうだから」

と書き物やら布片の類を鄭寧に疊む、藤吉の目は慙ち懐しい物を見るやうに輝い

た。

「オ、守り袋チウと春日社のお札だね、有つた有つた。あれは大旦那様が殿様から

御拜領の蜀江の錦たらいふ片で拵へた袋だつたて。あれを敬様の腰にさげさせて氏

神の春日様へお守札を受けに詣つた事を俺能う覚えて居ますだ」

「真に左様だつたね、宮詣りの時から敬三はお前に抱かれたのだね」

と真佐子も遠い昔を追懐して、其若い頃はさぞやと惚ばるゝ品の善い顔に微笑を

浮べた。

「だから俺今度敬様が凱旋したら、此世の思ひ出に最一度抱かせて貰はうと思ひま

すだ、はッは、ハ、ハ、」

と左も愉快氣に笑つたが、忽ち何か思ひ出したやうに、太い煙管をカタリと椽に置いて。

「それはさうと御隠居様、あの真島様の方の御縁談は何うなつたね。矢張敬様お歸りになるとスグだかね先方の注文は」

「さあ其事ですよ。先方では是非目出度い凱旋と一緒に式を済ませたいと云つてねモウ全部支度も調ふて居る様子ですよ」

「豪く急ぐだね」

と抛つたやうに云つて目をクシヤクシヤさせたが、煙管を取上げてサテ吸ふでもなく火鉢の灰を凝と眺める。

「それで御隠居様何うするだね、先方の注文通り敬様歸るとスグ貰ふだかねあの嬢様を」

「貰ふには貰ふのだけれど、此方では左様急ぐ氣も無かつたからね。尤も敬三の志

見任せに妾はする積りですが」

「敬様には異存はないに極つてるだ」

と藤吉は詰らなささうな顔をして。

「敬様はあの嬢様に惚れてるだからね」

無遠慮に云ひ放つ飾らぬ詞には、眞佐子は昔から馴れて居るのだつた。

「ほ、ほ、ほ、それは左様かも知れないね、添ふ以上は仲好くして貰はねば妾の

苦勞だからねわ」

「御隠居様、苦勞チウだが苦勞にも色々だからね」

藤吉は此處ぞと云つた風に熱心になつて。

「俺始めから云ふことだが、あの眞島様は餘り……」

と何か云ひ掛けやうとする時、周章しげに女中のお霜といふのが来て次の室へ手を突いたが、驚きにも打たれたらしく、棒もまだ肩に残して。

「あの、自動車……イエあの自動車で眞島のお嬢様が」

(一六)

周章てた女中の取次に、眞島の令嬢喬子の訊問を聞いて、眞佐子は急に座を立つた。

「おひとりですかね、お母様も御一緒？」

「あの、それは立派な自動車で。御隠居様妾まあ吃驚しましたわ、ブウブウと門の前で云ふものですから」

「これそんな事は可しい。早く御案内して客間へお通し申すのだよ、何を周章るのです」

とお霜を立てて自分は羽織を着替る。

敬三が在宅の頃は二三度訪ねて見たこともあるけれど、縁談が纏まつてからは父親の浩造さんとお母様が足繁く來られるばかり。それに先方の奴みでモウ間もな

く式を擧げやうといふ此頃、突如に本尊の喬子の訪問とは。と眞佐子は尠からず思ひ憊ひつゝも、手早く姿を整へて、珍らしいお客人に遇ひに出て行つた。椽に残つた藤吉は、眞島の嬢様と女中から聞いた時、苦虫を噛み潰した様な顔をした、そして其不平面を上げて眞佐子の出て行く後姿を見送りながら獨話を云つた。

『押嫁入でもあるまいな、何だつて今頃訪ねて来るのかな、妙なお嬢様があればあるもんだテ。あれがハイカラちうだから俺ハイカラ大嫌ひだ』
と煙管を自棄に叩いて煙草入を納めにかゝる。

『結納まで取換したので、モウ變がへする事は出来ぬと御隠居様は仰有るけれどあんなハイカラ嬢様嫁に貰ふのは此龍岡家の爲に善く無いだかな。第一あの浩造ちう父親が俺氣に喰わねねだ。世間の評判も善くないテ。成金者の癖に無法圖に威張りやがつて、俺等を虫虻同然に思ふてるだ』
何かの衝突でもあつたのが、罵るやうに云つたが又急に悄氣る。

『だが敬様が惚れてるだから仕方が無いテ。賢い御隠居様だが我子には目は無いから』
泣きながら立上る時、客間の方では喬子の喉いだ聲がして、續いて面白さうな笑ひも興ありさう。

『あれだ、敬様飛んだ物に惚れたいなア』

禿下駄をつツかけ勝手へ廻らうとしたが、黄昏の色逼る梅の梢を見上げて、何やら思案に沈みつゝ其儘立すくんで居た。

客間では、厚い座蒲團の上に着飾つた喬子が目の覺める姿で昂然と坐つて居る。火鉢にかざす白い手には、腕にも金環が光り、指には星光の輝きを宿す流行の眞中心に一分外れぬ衣裳の贅は自動車を下りる姿を見て、お霜がソツと魂消たのも道理である。これが今暫くの後には我子の嫁となり我家の人となつて、自分を母と呼ぶ女がど、眞佐子も美くしい容色と流手な装ひに魅せられた氣味で凝視つた。お霜が紫縮緬の風呂敷に包んだ嵩高な物を捧げて來て。

「あのお嬢様のお土産でございます」と置く。

「まあ何うしませうねわ、斯んな御配慮を」

と云はせも果すハキ／＼と、男の物云ふ風情で喬子にはこの年輩の乙女の人に怯む様子は些とも無い。

「何品だか妾知らないのですよ、母が差上げる様に左様申したものですから。碌な物ぢやありませんわ」

(一七)

思うた儘を打付に云ふらしい、淀みのない喬子の若い聲は、断へず受返詞のみをして居る眞佐子の慎ましい調子を壓へつけるやうに外に聞けた。

「……で父が陸軍省で確めたのでは此の末か二月の上旬と云ふのです、母の申しま

すのは此方にはキツト手紙が参つて居るだらうから、能くお聞き申して来るやにと」

「まあ左様でございますか、色々お手数をかけて済みません。此方からこそ其邊の事も能く聞質さねばならぬのでございますが、何分妾ひとりの事ですから」

「イエ、だから妾の方で出来る事は皆運ぶやうにして、ナル可くお留守に御面倒な事をお聞かせ申さない様にと、妾精々氣を付けて居るのですけれどね。父も母もあの通りの粗忽者なものですから、本統に困つて了ひますの」

「そんな事はございません、御親御の身になつては何や彼と御心配遊ばすのは道理でございます、それに引かへて妾の方では總て抛棄しにして。敬三が歸つて参りましたら、定めて叱られる事でございませう」

「早く歸つて戴きたいわ」

と顔も赭めす云つて喬子は汲まれた茶を取上げる。

「お上の方でお聞下さいましたら、それが一番確かでございます。妾の方にも負

傷が癒つて病院を出たといふ報せがあつた後些とも消息がないのでございます」

『まあ左様、随分だわね』

と半獨り語のやうに云ふ。媒介人からでも聞くべき筈の詞が、やがて與入れの嫁女其人の口から直接に出るのであるから、眞佐子は挨拶に當惑して、周章する事が度々である。その度に今の若い女の氣風が昔時と餘りに飛び離れて違ふことに驚き斯ういふ氣風を産む當世流の新教育には、又それだけの趣意があつて、敬三の口から才媛と賞める喬子の價値は此點にあるのかとも感心したり。併し此人が自家の人となつた曉、餘りに新しい人と古い自分との間に總ての事件が何の苦もなく圓滿に運んで行くであらうかと危んだり、けれどもそんな事は今更考へる問題でなく、モウ斯う結ばれた縁の糸の定めであるから、家思ひの藤吉が無闇に悲觀するやうに前途の取越苦勞に心を渡らすのは愚かであらう。誰が目にも釣り合ぬと見やう財産家からの嫁取りも、先方も進み此方も我子の望み通り叶うたのであるから。唯此上は新夫婦の身の上と龍岡家の將來に幸福の澤なるべきを祈るのが自分の立場である

と決着の考へを固めもする。左様思案を定めて其人に對ふと、過ぎると思はれた辯口も之で無ければ今の交際社會には立たれまい、女らしからぬと見ゆる點も、時世に遅れた老の邪推であらうと思ひ直しがつく。目の前に美しい花の姿を、早く敬三に見せて喜ばせたいと思つた。

『妾の方で急ぐのは、父は凱旋と共に式を擧げるのが目出度いふのですけれど、妾又思慮があるのですわ。お友達の正親町の嬢さんね、御存じでせう、あの武富つていふ銀行家の家へ入らつした。あの方も今新婚旅行の最中で、東北の方を廻つて盛んに繪葉書や何かで皆さんを羨ましがらせて居るのですよ。妾内地では他人に負けた様で厭だから、龍岡さんと一緒に青島に行つて見たいと思ひますわ。そして龍岡さんが働いた戦場なんか見せて貰つたら愉快だらうと思ふのですもの。だから一日も早く歸つて欲しいのよ、ね、善い計畫でせう。龍岡さんキツト賛成して下さいますわね』

これには眞佐子も何とも答へ得なかつた。座敷の外なる圓窓の下では、お家思ひ

の藤吉が繪にもかけない濫い顔をして佇んで居る。

(一八)

各地の雪信頻りに新聞に傳はり、不景氣を呪ふ聲のやうに、何年振の珍らしいのと取沙汰して、低い氣温に人間は縮み上る、凍結した水道栓をカチ／＼叩く音に路次の夜は明けた。

『まあ朝寝だこと』

と云つて花枝は離れ難い寢床を出た、冷切つた空氣の中に白う點る電燈の下、母の病の寢姿は一時に眠氣を散らして了ふ、枕元の火鉢へそつと手を遣つて見て、消えた火に眉を蹙め、急いで勝手へ出やうとすると芳枝は聲をかけた。

『モウ少し寝ておいでよ、三時間も眠てはしません、四時を打つてたからね』

『そんなに遅かつたの、それでも能く眠たわ、火の消えたのも知らないで、お母さ

ん寒かつたでせう』

『イ、エ、妾は斯んなに暖かくして寝て居るから』

と向き直つて。

『火鉢の火は妾が消したのだよ、餘り勿體ないと思つてね、夜間中では大變だからね。成可く消費の少い様にしないと、お前の苦勞が重るばかりだから……』

『又あんな事を朝から』

と云ふ聲は次の臺所の方に聞えて、花枝は間もなく炎を上げる炭火を盛つて来た。

『そんな事を心配しては厭だつて云ふぢやありませんか。火なんか消さなくて可いわ。炭はドツサリ買つてありますよ』

『ほ、ほ、それは買つてはあるだらうけれどね』

『お母さんはそんな事ばかり心配するけれど實際此頃の勝手元は賑やかよ。それにお米が安いでせう。其爲に不景氣だつていふけれど、宅などは何程仕合せるか知れ

ないわ。妾そんなにお母さんの心配する程苦勞は有りはしないもの』

『そんな事があるものかね、病院の方ばかりでも……』

『それも此通り確んど納めてあるわ』

と墓口から小さく疊んだ薬價の領收證を出して見せるやうに膝の上にひろげる。

芳枝には娘の此遺縁が不思議に思はれた。奥服屋からの裁縫物は年が明けてからは全で入つて来ないことが寝て居る身にも能く解つて居る。融通しよう物は小さな行李の中まで見透いた貧のドン底である。それを誰に相談しよう親戚とては一人も無い。イヤ唯ひとり壓乎として力になるべき人があるのであるが、母子を此浮世の裏仕居なる路次の奥から救出して、日の目を拜ませて呉れねばならぬ義務を有つ人があるのではあるが、弱い者に崇る運命の神は、正直な老女と孝行な娘の家に容易に幸神の使者を向けなかつた。救ふべき義務ある人は富に飽いて榮華の月日に嘯き、救はるべき權利を有つ母子は貧に泣いて味氣なの生活に苦んだ。

芳枝はもと女名所の京で左様をとつた身である。また電車といふ亂暴者が出来ぬ

前、四條の橋の凝寶珠に脈をのせて、あれは圓山の灯かいなど元祿小唄を口ずさみの、せゝらぎの水聲に興を惹かれて、暗い蠟燭の點る家に憧れの客多く。古い京洛の氣分は青樓町を始め到る處に残つて居つた、あの頭祇園で嬌名を歌はれた藝妓お芳の果はこの芳枝であつた。

尊い紋瓦を大路小路に堀起し、静かな町に鐵の棒を敷く電鐵會社が起つた時この日本始めての企業に目を着けて其材料を横濱の某外商から取次ぎ、尠からぬ金を儲けた東京の紳士があつた。

凡そ三月が程は京に滞在して木屋町の旅館に起臥し、時には旅のつれづくに祇園先斗町の春に遊ぶのであつたが、此紳士いつか花中の名花お芳の容色に魂を打込み大金の力で美人を我物にして型の通りの妾宅に頻りに足を運んで居た。

それ迄の経過しか世間には知れなかつた。で芳枝のお芳間もなく其紳士の胤を宿し、産んだ子が今の花枝であることや。京の家を疊んで東京に移つたことや。杖柱と思ふ男の寵に離れて、今此路次に日影の生活を送るまでの凡そ二十年に渉る母子

の身の上は、誰も詳しく知る者は無かつた。

昨宵夜を更かしたといふ母子が寝すの物語は、兩人を捨て顧みぬ紳士の上に關しての事であつた。紳士は今實業界に羽翼を伸す眞島浩造。

母の爲に疑問となつた花枝が生活との闘ひ振。それには大きな秘密があつた。花枝は其日の夜も毎日の通り出稽古と云つて三味線を抱へ身を切る風を衝いて出て行つた。それは恰度眞島喬子が龍岡の家を訪問した當日の事である。

(一九)

寒い橋の畔へ毎夜の夜泣屋が荷を下してから一時間ばかりになる。その俵帳場から若い衆がヒョイと飛出して甘い香のする白い蒸氣の中へ顔を突込むと『寒くツて堪らね』と罵るやうに云つて、頻に物喰ふ音を立てた。お常客と見わけて夜泣の老爺は團扇をばたつかせながら高調子で話しかける。

「宵の口から馬鹿に冷ゆる晩さね」

「こんな晩がお前さんの書入れたね、儲かるだらう」

「ところがカラ駄目でね、米の安い所爲さ」

「は、は、は、米が安いだつて、これは別物だらうちやアねい」

「左様で無に」

と老爺は銅壺の火を自棄に換き廻しながら不平らしく云つた。

「安いと妙なもので、三ばいの飯は四はいも食ふ奴さ。お腹が太いと蕎麥でもあるめねで近寄らないね。それに戦争で原料粉が上ると來て居るから夜泣屋は泣かされますよ」

「成程ね、そんな理屈もあるだらう」

「熊さんなざア可いやね、お客を乗つけて走つてれア寒くはなしさ。この中に汗を掻いて金が儲かるのはお前さんの稼業ばかりだ」

「汗は汗だが油汗に血の汗よ。いづれ愚かはなかりけりイ」

と雲右衛門を唸つて腹掛をガチャ／＼云はす。夜寒の町を遙かに高調子の三味線が聞える。夜泣屋は耳を聳てた。

「ホウ八時だね、毎夜の門づけ屋が来た様だ」

「あの女藝人かね、ウム美しい音が聞いたらア。極つた時間に遣つて来るね」

「感心な者さね。若い身上で僅たひとり此盛り場へ入つて来るのは餘程度胸がなくちやア出来ね仕事だ、それに腕が冴わてるから感心だね」

漸次に近く寄せる節面白い絃の音は、橋一つ越ると歌舞の巷の遊廓となる其廓の軒別を此頃の宵々流して歩く若い女藝人の撥の冴わてる。

「此方らには分らねわが巧いのだつてね。皮肉屋で通つた師匠株の若吉つて姐藝者が馬鹿に賞めて居たつけ大道に曝す代物ちやア無わつて」

「左様だらうとも、彼女は全く惜しいもんだ。最買にされてるから毎晩大分の金を上げて行く様だが、不思議に顔を見せないさうだね。熊さん拜んだことがあるかね」

「その事さ。良い聲でもつてあのへたらう、帳場の奴らが湧きやがつて競争で編笠を覗く奴さ。美しい容色だつて云ふせ」

「あれで面が上等だつたら此新橋に突き出したつて立派なものだよ」

「ホイお通りだせ」

と熊さんは屋臺の外へ弾かれたやうに出た。

「早いね、モウ聞ゆる頃だつて皆が待つてるせ、眞の事さ」

と一ぱい機嫌で弄ひ半分、投げるやうに自分に交された見知らぬ男の聲にも愛嬌

稼業の編笠は傾いた。

「有難う、毎度御最負に……」

「早く入んねわ、姐さんが来なければア廓の日が暮れねわや、なア爺さん」

「遠ひなし、能く勉強しなさんね」

夜泣屋も顔を出した。

「ほゝほゝゝ」

と絃聲よりも美しい聲、御免なさいと會釋して三味線抱いて行く姿は、橋の上に足音寒く、すつきりとした影法師。

X X X X X X X X X X

土地の評判に上つた若い女藝人は花枝である。母の病と家の貧を我身ひとり双肩に荷ふて、出稽古と苦しい嘘を拵へて家を出る彼は、毎夜この新橋を稼ぎ場にして世を忍び駒の細い絃に辛い生計を寄せ、大道藝人と身を落したのであるが、酷い運命の手は飽まで彼女を虐遇むのか、今宵しも重ねて大難は花枝を的に襲ひかゝつた。

(110)

新婚當日の乗用として賑へられた善美此上もない自動車に乗つて、喬子は張り切

れるやうな誇を満足さすべく盛んに交際仲間を飛び廻つた。そして武名赫々たる青島攻畧軍の最後の凱旋隊が近く帝都に入る日は、即ち自分と殊勳中尉龍岡敬三が結婚の式を擧げる時である、といふことをそれとなく自ら吹聴した。これは父浩造も母の元子も許してのことである。そして父と母とは我子に劣らず有らゆる機會毎に娘の嫁入沙汰を大きく派手にと世間へ傳へることに努めた。

今日は龍岡の家に不意の訪問をして眞佐子を驚かせた喬子、手厚い晩餐の饗應を受けた後そこを辞したのであるが、風を切つて町を飛び、數多の目を睜らせながら樂と坐る新式自動車の乗心地に、其儘邸へ歸るのが忍びぬらしく、迂回をさせて芝の友達の前に向ひ、いよく歸宅の途についたのが夜の九時過ぎであつた。獸類の吠る聲を立てさせ、轟地に雑沓の町を突き進む運轉手の新型な服装は、昂然として風に御した姿態の美しい令嬢と相應しく何處の榮華の子ぞと道行く人の足を止めさせる。

編笠に深く顔を隠して、花枝が家路についたのも恰度其頃であつた。今宵の幸も

意外に多く、帯に挟んだ墓口が重いのに、彼女の心は軽く緩んで、ホツとした身体をトある小路の軒下に佇み、張り詰めた氣の凝りに手足の節々が刺すやうに痛いのを擦りながら、ツイ其處から電車へ乗る用意に、袂に入れた風呂敷を取出して、編笠を包みにかゝらうとした時、思ひもかけず狭い小路に颯と一陣の風捲起し、一臺の自動車は路一ばいに轟き來つた、軒を離れた花枝はハツと思つて身を轉さうとしたが、遅し太い護謨輪は重く滑つて、周章で、運轉手の身体が機みを喰つて前へめると同時、隼鷹の小禽を押へた如く、彼女の身体は車の下敷になつた。あれツと叫んで車上に立つたのは喬子である。此椿事あつて一時間の後、駿河臺なる眞島邸の一室で寢臺に横はつて居る花枝の姿を覗き込み、喬子と浩造はひそくと語つた。

氣遣ふには及ばん、決して大した事はない、村山博士が彼如云ふのちやから大丈夫ぢや、それに擦過傷一つ負はぬのはよく運の好い奴と見へるテ」
 「妾吃驚したわ、小田が悪いのですよ、あんな狭い所へ入るんだもの」

これこれをし云ふては可不ん、取締規則は守つた事にして置かんと面倒ぢやからなまあ可かつた、其方に怪我があつたのかと思つてな、周章で村山博士は呼ぶわ、お元は癩を起すわ家中ひつくり覆る騒動をしたよ」

「でも妾何うなるかと思つて」

と喬子は恐い物のやうに寢臺を覗いて、

「まだ寝て居るのね」

「今の藥の所爲ぢや、モウ暫時すると自然に目を覺すと云つたから其上の事ぢや、ナアニ負傷さへなければ此儘歸しても可いのぢやが、まあ毀れた三味線の代でも持たせて去なすが可い」

斯う云つて浩造は蔑しむ如き目で花枝の姿を見下した。

大した負傷のないのを幸い、毀れた三味線の代金でも與らせて歸すが可いと云つた。浩造の意中では、始め途中の自動車で變であつたと聞いて、喬子の身の上かと動轉せんばかりに驚かされた、それが今になつては馬鹿々々しく腹が立つ。周章で醫學博士まで聘んだのが無益の物費になつて、妻の癩も辛い目見たけが詰らぬ損だつた。それやこれやでこの事故の起きた原因たる何處の何者とも知れぬ女藝人が憎くて堪らぬのである。蔑んだ目をいよゝく険しくして、

「高の知れた卑しい下等社會の女ぢや。斯な者に私やお前が直接するには及ばんテあの高木にでも云ひつけて處置させやう。抛つて置くが可い」

「三味線弾いて外を流して歩く女ねね」

「左様ぢや〜女乞食ぢや、豪い物を連れて歸つたの、はッは、ハ、ハ」

愁眉を開いた浩造は高く笑つた。其聲が耳に入つたか花枝はウンと微に唸いて身体を動かした。

「氣がついたやうぢや、物を云ふのは面倒臭い、さあ彼方へ行かう〜」

と喬子の手を取る様にして浩造は室外へ去つた。

胸部を劇しく打たれて人事不省に陥つた花枝は其場から自動車に乗せられてこゝ、眞島の邸へ連れて來られたのである。跪いても力んでも、五体一ばいの巨きな掌中に包まるゝと夢心地に覺えて、やがて頻に咽喉の濁くのみに水を水をと呼べど叫べど應ずる聲もなく、ブンと強い薬の匂ひ鼻を衝くに堪へられず、ハツと思つて目を開くと、眞白の敷布は我家の狀にもあらぬ變つた寢臺の上。

『あれ』と云つて花枝は起き上らうとしたが、劇しい眩暈がして其儘倒れたけれど、もモウ意識は判然として、宵の災難が現然と浮んだ、無法な自動車に轢かれて車輪の下に苦い聲を上げた。それまでは知つて居るのであるが後は覺わぬ。倍はあの場からにの病院へ連れられたのかと、騒ぐ心を強て制へつけ、靜かに四邊の様子を見廻はした。

次には、醫者が看護婦であつたらう確かに人の話聲であつたと、夢うつゝに耳に入つた人聲を幻影を捉むやうな心地で考へた。と薄墨の文字の痕讀むやうに。

『下等社會の女……女乞丐……』

と太い濁つた聲の記憶が漸次に明確と浮んで来る。女乞食……下等社會の女……それは自分の事ではあるいかと思ひ當つた時にゾツと髪の毛が一本立になるかと覺わて、ブル／＼と身を震はせ花枝は痛む身體を強て起した。

病院で無いらしい、此處は一休何處だらう、何處へ連れて來られた自分だらうと荒縄で縛り上げられたやうな苦しい痛みを堪へて、今度は部屋の中の光景を仔細に眺めたが、和洋折衷の可なりの廣間で裝飾の結構は目を驚かさばかりである。花枝は忽ちそれと心づいた。自分を轆いた自動車の主がその邸へ連れ込んだのに相違ない。

自働車で乗廻す階級の、いづれ事足る富豪の邸内に、今此身を置いて居るのである、斯う氣附いた時彼は恐い物のやうにして寢臺から離れかけた。

CHID

胸から腰にかけて盤石で押へつけられるやうな痛みを感じるのを、強て堪へて花枝は寢臺を離れた。足には踏む力なく危く倒れかけて壁に倚れる。髪はバラ／＼に亂れ着物は所々裂け、土さへついた儘の淺ましい姿を、明るい電燈が寂しう照した。

餘程廣い邸宅らしい、人の氣勢もなく物音一つ聞かない。花枝は小説なぞにある悪漢の爲に誘拐されて恐ろしい穴倉の底に幽閉される女、そんな事に思ひ較べて一たびはゾツとしたが、察する所車の主が過失の責任を知つて介抱の爲に我邸へ連れて歸つたのだらうと推量した。それにしても斯んな所にジツとして居られる身体では無い。家に残した病の母が定めて待つて居ることだらう。モウあの時からドレ位時間か経つたことか。薬の香がするので醫師の手當を受けた事は解る。手當の後静か

に此室に寝かされて居たのだらう。幸ひに血の出る負傷も無いらしい。痛みを堪へても早く此家を出て宅へ歸らねば、と思案を定めた花枝は人を呼ぼうとして入口の所まで行つたのであるが忽ち又夢うつの中の人々の聲を思ひ出した。女乞食……下等社會の女……。

自分に對する此家の人々の感情が明白に知られる侮蔑の詞では無いか。

入口の所の柱に倚れて花枝は躊躇ふた呼んで可いものか此方から出て行かうか、誰か來て呉れないのだらうか。

遙の方で時計が鳴る、花枝は耳を澄ませて音を數へた。そして十一時と知つた時我身を氣遣ふ母の顔が目の前に見ゆる様に思つて、モウ斯うしてはと戸に手をかけた時、廊下を此方へ來る足音がする。ハツと思つて花枝は寢臺へ戻つて腰をかけた入つて來たのは召使ひらしい年増女で、眠さうな目を擦りくく花枝が起きて居るのを見て吃驚したらしく、オツと云つて其儘外へ引返さうとした。

『チヨイト貴方、あのお尋ねしたいことが』

と花枝は聲をかけた。女中は何やら狼狽した様子であつたが再び入つて來た、そして凝と花枝の様子を凝視するのであつた。

『あの妾飛んだ御厄介をかけたやうで、些ども覺わなかつたものですから』

『お前さんモウ快いのかね、氣が注いたのかね』

と横柄に云つてまた目を睨る。

『ハイお蔭でモウ何うもございませんあの此處は何方様でございますか』

『あれお前それも知らないの、恐ろしいのねね、氣を取失ふといふものは、段々驚愕が鎮まるらしく、顔色を直して近づくと。』

『まあく大した怪我がなくつて仕合せだつたねね、危ない事だつたに』

『有難うございます……些ども存じませぬものでしたから。此邸は何方様でございますか』

と重ねて問ふた。

『此家は眞島様だよ駿河臺の』

「エッ」

と花枝は顔色を變へた。

「お邸のお嬢様の自動車に轢かれたのだよ、それで連れてお歸りになつてお手當を爲さつたのさ。それでも相手がお嬢様の車だつたからお前の幸福です、其儘逃げられても仕方はないものねわ」

「あの此方が眞島様……あの駿河臺の……」

「は、は、は、眞島浩造様と云つて名高い大富豪のお邸だよ、知らんのかねわ」

花枝は再び氣を取失はんばかりに驚いたのである。ア、眞島浩造、それは年月頃を戀慕ふ我現在の父ではないか。捨られて顧みられぬ不運の母と共に、いつか晴れて親子の名乗をする日を、神佛に願ひかけて待つ我爲の父親ではないか。

CHIND

怨めしい父戀しい父、それは實に花枝の父親に對する飾らぬ感情であつた。で今東京の實業社會で羽振を利かす富豪の眞島浩造が自分の父であるといふ事を始めて母から聞かされた時、其時からといふものは花枝の魂は夢にも現にもこの駿河臺の邸宅へ幾度となく飛んだのである。イナ彼は母親に秘密で此家の門外を人に怪しまるゝ程行きつ戻りつしたこともあつた。左様して一たび人知れず無情な父親に逢ふて、痛ましい母の身の上を訴へると共に、懐しい戀しい肉親の情愛が味はひたいとばかり思つた、けれどもそれは何時まで待つても遂に叶ふ希望では無い、といふ事を此頃になつて花枝は悟つたのである。京の女に珍らしい凜とした意地を有つて居る芳枝は、浩造が當初の約束を忘れたやうに親子を捨て、振向きもせず、手切の印と云つて僅かの金を他人の手から渡さうとしたのを奇麗に跳つけ、自分は兎も角花枝といふ眞實の娘に對して愛情の眼が明いた時、改めてお世話になりませう、と強い事は云つたが陰では齒をキリ／＼と噛んで泣いた。それは花枝が物心づいた五つの頃であつた。それから後の十餘年の月日がいかに親子の者の爲に辛い悲しい長い

虐境であつたことぞ。生れ故郷を遠く離れて、方角さへも能くは判らぬ廣い東京の目まぐるしい生活の荒海へ、無残に投げ出された優しい京女の兩人は、死ぬるよりも苦しい目をして今日まで生き存らへたのである。

それ程の苦勞をして意地を守つた芳枝が、去年の暮に近い頃、眞島の邸へ向けて一通の手紙を出した。浩造に當てた親展書で、それには斯んな意味を書いた。……今更妾に對する貴郎の罪を責めるのでは無い、又今の貧苦を救ふて貰ふ心も微塵有たぬ。唯御相談するのは娘の身の上である。妙齡になつた娘の所置に就ては當然父たる貴郎に何かの意見がある筈である、それを聞く爲に此手紙を差上げる。妾への愛は虚偽であつたとしても、虚偽から生れた眞實の子に對しては親たる責を免れる事は出来まいから……此手紙が返つて來ぬのを見ると浩造の手に入つたに違ひない。それに遂に何の音沙汰もなかつた。此事を花枝は能く知つて居るのであるから、冷たい父親の心に慈愛の花が開いて、暗い母子の上に嬉しい春の光が射すことは逆も叶はぬ希望であることを悟つた、が悟りはしたが諦めはつかぬ。此世を消えて去

る人にも隨いて行きたいが親子の情であるものと同じ土地に住み、あの家あの人と父親の身の上を判然と知りながら、遂に名乗り合ふ事も出来ぬといふ悲しい運命は何うしても諦めることが出来なかつた。男親に手を引かるゝ幼い子供を途中に見てもツイ涙が催される。兩親揃ふた姿には乞食の子もその幸福が羨ましいと思つた。斯も恩愛の絆は斷たれ、人の世の榮華に誇る富豪の父と、貧の詫住ひに泣く母親との間は、百千萬里の海山よりも遙かに險しく遠い距離とはなつた。餘所ながら知らぬこと、物云ひ交すことも近づくことも、生を變へねば出来ぬかと思ふと、貧の苦しみに較べては物の數でないと思つた。

それが何といふ今宵の機會ぞ、自分は夢現を辨へぬ間に戀し懐しい其父親の家へ連れて來られたのである。眞島浩造？眞島浩造！花枝は前に立つ女中を眺め部屋を眺め、我姿を凝と眺めて夢よりも明確とした印象に身体の痛みも忘れて飛び立つ様に思つた。

「あの眞實に此處は眞島様のお邸でございますか」

「ほ、ほ、何でそんなに疑ふのだよ、嘘も眞實もツイ今の前まで大旦那様もお嬢様も此處に居らつしやつたのに」

「エ、それではあのお父様が」

と云つてハツとして口を噤む。其の顔を覗き込んで女中は吹出すやうに笑つた。

「まあお前まだ正氣にならんかね、大旦那様と云ふに、こゝはお前の宅ぢやないのだよ、能く氣を鎮めるが可い、それ、斯んな結構なお庭先が見れるだらう」

女中は斯く云ひながら窓の障子を開いた。深山のやうな植込みに、電燈の光月の如く、溪流もあるのかサラ／＼と水の音。

(二四)

開けられた窓から冷切つた夜の空氣が水の様に流れ込む。それが心の動轉に發熱を覺ゆるばかりの身體へ爽かに沁みる。花枝は混亂になりかけた頭腦を自分で制す

るやうにして、はしたない振舞に秘密を人に覺られまじと努めた思はずお父様と云つた詞に呆れ、まだ正氣づかぬかと問ふ女中に對つて。

「ほ、ほ、妾まだ何うかして居たのですね、御免下さいまし」

「朝まで寢て可いのだから、能く氣を鎮めてね。妾氣のついたことを知らせて來ませう」

と女中はさつさと出て行つた、花枝は茫然として佇んだ。

それでは夢現に耳に入つたのは懐しい父の聲であつたか。それにしても我の身の姿を罵つて、下等社會の女……、卑しい女乞丐とは、マア何といふ酷い情ない詞であらうか。無論これが自分の娘であらうとは父の知りさうな筈もないけれど、頭を下げて過失の罪を詫なければならぬ筋の自分に向つて、聴ねぬのを善いことにしてこの雑言は何事ぞ。これが苟且にも紳士と名のつく人の口から出る詞であらうか。無情の父とは豫てから知つて居る、冷酷な父とは能く辨へて居るのであるが、斯な場合にも其性格の一端が、猛獸の毒牙の白う光るのを見るやうに、淺ましくも興疎

く想像されるのは何といふ情ないことであらうか。不思議の機曾に神佛が授けて下さるやうに、今夜の今といふに自分に捉へられて居る。逢ひたい見たいの父は眼の前に居るのであるが、あの酷い詞から推すと、名乗つて出て其膝に取絶つても、母の手紙と同じやうな目に逢はされるのが定であらう。ア、此得がたい機會に居ながら、これでも父には縁の無い自分か。

花枝は悲しい涙をハラ／＼と零した。そして又斯も思ひ直した。

我娘と知る由もないから、尊大に馴れた富豪氣質で、誰が目にも零落の知らる、此姿を見て、女乞丐と罵りもしたのであらう。我子と知つては忽ちに慈愛の窓の戸が開いて、眞逆に知らぬとも得はいれまい。其の時こそは日頃の思ひを一時に晴して、母の心ふ安くしたい。

此機會を逃してならうぞそれより此儘行つて父に遇はう、と花枝は氣を勵まして部屋を出た。扉を明けると廣い廊下で、突當つて折れる所に手洗場がある。其處まで来た彼はギョツとして立止つた。自分に對つて立つ女が居る、と能く見るとそれ

は壁一面の大姿見に我姿が映つたのである。花枝は色青ざめた我面を覗いて、それから亂れた姿を凝と眺めて居たが、忽ち氣を取失ふた如くよろ／＼として欄干に倒れかかり、柱に背と身を支へた。微かに漏る、切ない聲は。

『斯な姿ではお母さんの意地が……矢張妾お父様には逢はれない』

(一五)

芳枝は病の床に寂しう娘の歸宅を待つた。大寒に入つて夜の冷は格別に劇しい、感冒なぞ引いてはならぬから暫らく出稽古は休むが可からうと、度々制めたのであるが花枝は肯かなかつた。其度に左も苦にならぬ顔をして。

『向は大家だからそれは手厚い待遇ですわ。それに嬢さんが妾に能く懐いて、宅の人の様に皆さんがして下さるから些とも苦にはなりません。謝禮だつて澤山頂くのですもの、之を休んでは罰が當つてよ』

斯う云はれるとそれを強て制める譯には行かぬ。此頃の苦しい世帯は花枝ひとり腕に繋つて居るのである

貧で足らいで執念い病氣までして、孝行の娘をいつまで苦めることかと、越方行未を案じる末は、思ひは可愛い花枝の上に凝り固まる。待つに遠い時間を數へて、寝られぬ身を幾たびか悶へた。外は雪にでもなつたのか寂寞として世間は寢静まつた様子である。

「何故今夜は斯んなに遅いだらう」

と獨語しながら物憂い身体を起して芳枝は寢床に坐つた。最前聞いたのが十一時の計計である。遅い時も滅多に十時になつた事はない、と思ふと急に胸が騒がしくなる。案じ過として神経衰弱よと笑はれることが度々であるが、笑はれても其度に事の無かつたのに安堵の胸をさする。萬望變つたことなく歸つて來て呉れて、何んなに氣の重い時でも優しい聲を聞くと、病氣を忘れる位に自分の爲に嬉しい其姿を見せて呉れ、と祈るばかりに氣を焦つた。

格子戸が明いたのでヤレ／＼と氣を緩めて、枕を支へて伸び上がると、花枝かい大變遅かつたね、と先づ氣やすめの聲をかけた。

「イエ私ですよ」

と云ふ聲は隣家に住む巡查の妻のお安といふ、至つて心の良い、日頃から能く氣を注げて母子の上に何彼と世話を焼いて呉れる女である。

「あの花枝さんまでせうね」

と云ひつゝ、何やら普通でない氣勢で座敷へ上る。

「まだ今夜は歸つて來ませんのですか」

「左様でせうね、では矢つ張さうか知ら」

と不安に襲はれた顔の色、芳枝は突立つた儘で居るお安の様子と云ひ詞と云ひ、合點行かぬのでわなくと心を振はせて。

「あの花枝が何うかしたのでは……」

思はず知らず起ちかけて、不自由な身を枕屏風に支へる。

「イエ、あの、また確な事では……」
と之も淀む聲を振はせた。

「花枝さんは神田の呉服屋さんへお稽古に行つてるのでせう」

「ハイ左様でございますよ、それが何うか」

急込まれる程一方は當惑の体で、甚く躊躇らうて居たが思ひ切つて坐つた。

「イエあの私が見て来たのぢやないから違ふかも知れませんがね。だから心配して病氣に障へては可けませんよ」

とお安は先づ警戒して置いて。

「一時間程前に新橋の浮世小路といふ所でね、烏追姿の娘が自動車に轢かれて大騒ぎがあつたのですつて」

「へむ」

と云つた芳枝はそれよりも早く娘の事が聞きたかつた。

「その烏追の娘が……」

「そして花枝が何うかしたので……」

双方の詞が纏れる。

「その時近所を通り合せた人の知らせですが、怪我をした烏追姿の娘が此方の花枝さんに……」

芳枝は顔色を變へた。

(二六)

花枝が眞島の邸を脱けて宅に歸つたのは其夜の一時頃であつた。犬に吠つかれ巡查に怪しまれ、消れ入るやうな思ひで我家の門近く走り着いた時、汗に浸つた身に何とも云へぬ心持の悪寒を感じて、齒の根も合はずガタ／＼と慄へた。

モウ此時には劇しう精神をつき揺かした父の事は考へなかつた。宵の間一時を規則の様にして歸つて来る自分が、今夜の遅いのを母を何うして待つて居るだらうか

寒威が障つて長い不在の間に病が募る様なことはなかつたらうか。とそればかりを案じて跣足で走つた。身内の痛みも何も忘れて。

門口に立つて花枝はハツとした。家の中には二三人の聲がして、燈火も明々と照つた。金盃の音やら團扇の音やら。モウ普通事ならぬのが知れて目の眩むのを飛び込んだ。其儘上りかけて泥まみれの足袋を撈るやうに脱ぎ捨てる。あら花枝さんと低い聲で云つて巡査の女房が一番に出て来た。

『まあ怪我は無かつたの』

『は有難う、母が何うかしましたか』

と混乱の聲は震ふ。

『あの途中で怪我があつた様は噂が聞けたものだから、それを氣遣ふてね、癩が差込んだのですよ。今暖めたのが利いてスヤ／＼と寝て居られるから大した事はありませぬ』

と立ちながら云つて花枝の姿を不思議さうに眺めた。

『まあ左様でしたか、何うしませうねね皆さんに御厄介をかけて』

漸く落ついて振れこぢれになつた着物を直さうとすると、忘れて居た總身の痛が急に湧き立つやうに起こつて、殊別膝の關節から下へかけ小刀で肉を抉り取る様な激しい刺痛に、思はず『あ』と云つて其處へ屈む。何して聞けたのか、今宵の事が母の耳に入つては、隠した秘密は甲斐なく知られて、又それが爲にどれだけ煩悶をかけることやらと、痛みを堪へて當惑した。

『矢張何うかしたのねね、足が痛むのですか』

と氣遣ふて呉れる他人の深切にさへ花枝は急に應へる術を知らなかつた。

『イエ別に何うも……』

とは云つたが、何うも無い様には逆も装はれなかつた。

『あの母は何か知つて居るのでせうか』

『別に何も……唯怪我があつた噂をね』

双方共に曖昧に云ふ。借は三味線さげて門に立つ秘密は、近所界限にも知られた

ことが。假令世界中の人が知つても、母だけには知らせたくないと思つた。
世話をかけた人々に厚く禮を云つて歸つて貰つた後、スヤ／＼と睡る枕邊に寄つて、そつと母の顔を覗くと、思ひ假しの所爲か半夜の惱みは又ひつそりと頬の肉を殺いだやうである。

「お母さん、お母さん」

と、早く安心させたさに呼び覺ますと微に目を開いた芳枝はそれと見て急に身を起す。

「お母さん、動かないで居て下さい。妾大變遅くなつて濟ませんでした」

「花枝、まあお前怪我なしに濟んだのかね」

「は」

と云つた後は咽喉に詰る。何う云はうかと周章てた時、芳枝は蒲團をすべつて手を伸すと、突然花枝を引寄せるやうにして。

「花枝、堪忍してお呉れ、堪忍してお呉れ」

「お母さん」
涙の堰は一時に切れて、程と娘は轟々と固まつて泣いた。

(一七)

堪忍してお呉と云ふ母の詞の意味は能く解らなかつたけれど、手を取られて涙ぐまれては何がなしに悲しさが込み上げて、咽び泣きに慈愛の膝へ顔を伏せた。

「お前モウ隠さないで可いから打明けて云ふてお呉れ。何處も怪我は無いのかね。」
妾それが心配でならないから、今お安さんに頼んで警察の方へ開合せて貰つたけど些ども様子が判らないし、何處へ連れて行かれたか全然見當がつかないので、本統に何うしやうかと思つて獨で氣を揉んでると又持病が起つて來てね」

「濟みません、濟みません」

と花枝は泣きながら云つた。

「濟むの濟まんのつて、それは妾が云ふことです、お前の様な孝行な娘に大道藝人の真似を爲せて、この寒い晩に辻に立たせたのは皆妾の罪なんだから……」

「お母さん、隠して居たのは許して下さい。決して顔も名前も世間には知られて居りませんから」

「イヤそんな事を妾氣にしては居ないのだよ。そんなことまで氣苦勢させて辛い目を見せたかと思ふと、妾それが悲しいのです、妾それがいらしいのよ」

瘦せた掌で顔を覆ふた。涙は止めどもなく青白い頬に傳はる。いつもの花枝なら母の涙を見ぬ中に、氣轉に話の筋を外らせるのであるが、今夜ばかりはそれも出来なかつた。甘い乳放さぬ嬰兒の心も斯やと、唯モウ何時までも母の膝に斯うして俯伏して居て、目まぐるしい世間の事が一切目にも耳にも入れたくないと思つた。

襟に落ちた涙を拭くと、芳枝は子供を賺す様にして烟び泣く我娘を起つた。

「此間から妾何も合點の行かぬ事があるから、質ねて見やうとは思つたけれど、寢て居るばかりで何の手助けも出来ない妾が、餘計な事を云つて反つてお前を困らせ

てはと思つて控へて居たのですが、モウ二十日ばかりになるわね始めて出たの晩から。あれからズツと其方へ行つて居たのだね」

花枝は漸くに涙を拭いて顔を上げた。

「それまでには種々考へたのですけれど、お裁縫の方が薩張閑になつて了つて、お母さんの薬を断らす様な事があつてはならないと思つて……他に何うする智恵も出ないものだから、妾思ひ切つて三味線抱へて歩いて見たのよ、すると一晩に多い時は二圓ばかりもお錢が入る事があつて其日の生活を缺かないで行けるもんだからお母さんを欺しては濟まない、と思ひながら……お母さん許して下さい。妾始めてお母さんに嘘をつきました」

「妾その嘘が嬉しいのよ。でも此頃の寒さは宅に寢て居てさへ徹へるのにお前まゝ能く何うも無かつたね」

「寒さなんか些とも何うもないのよ。だけれど始めての二晩三晩は、何だか編笠の中を覗かれる様で、それに絃の調子が變になつて……」

「左様だらうとも、男でさへ門藝人は荒稼ぎの様に云ふのだもの……お前の氣性だから出来たのです、妾などには逆も」

と云つたが健氣な娘の振舞につけても自分がまだ足手纏ひの花枝を連れて、無情の浩造に捨られた當時、幾度か弱い心に惱まされた悲しい事の種々を思ひ浮べた。

「五つになるお前を連れて廣い此東京を何處を當ともなく彷徨ひ歩いた時です。死んでも西京に歸つて恥辱は曝したくないと思つて……あれは確か自黒の近所だつた途中で一人の尼さんに出會して、其姿を見ると急に羨ましくなつて、モウ／＼斯んな輕薄な恐ろしい世の中に居やうより、いつそ歌の文句の通り淨世捨ての尼法師になつたらと、其尼さんが寺へ歸られるのを隨つて行つた事もありました。けれどもお前の將來の事を案じると、自分だけの樂は出来まいと思ひ直してお寺を出た事があつたが」

これまで語つて芳枝は感慨に堪へぬものゝ如く、苦しませにホット太息を吐いて。

「その時のお前の身の上の希望は今になつても叶はぬ上に……女の嗜みに教へた藝を大道で賣らなければならぬ破目にならうとは……斯んなことならあの時に、世の中を捨てたが増したつたがね」

(二八)

梢に危い病葉を木枯が来て弄ぶるやうに、精根の疲れた長い病氣の揚句へ過度の憂慮をしたのが悪く、芳枝の容態は漸次に可けなくなつた。當初は感冒だつたのが肺炎に變じて、今では心臟を犯されて居るといふのが醫師の診斷であつた。昨日からは朝夕二度の來診となつて、其都度に首は傾け低い聲で手當方を注意する醫師の詞を聞く時には、花枝は自分の命が先に消ぬかと思つた。

せめて時候でも暖かくなつたら、と雪のやうな朝の霜も恨めしく、底冷のする流し元で粥湯の米を洗ふて居ると隣家の女房のお安が顔を出して病人の事を深切に尋

ねる。誰ひとり倚頼にする人も無い身には、片ほどの優しい詞も沁るやうに嬉いものである。お安は奥を覗くやうにして臺所へ入つて来た。心易い仲で。

「寒いぢやないか、これでは病人に徹へるわねわ」
と焜爐の火へ手を出して。

「それでも花枝さん能くそんなに出来るのねわ、皆も本統に感心して居ますよ」
花枝は眞赤になつた手を拭きく相手になる。

「ほ、ほ、そんな事はありませんわ、何時も皆さんにこそ御世話にばかりなつて」

「何のお世話が出来ますものかね、此路次位また人手のないのも珍らしいからねわ」

と云ひつゝ潰れてバラ／＼に亂れた花枝の髪を氣の毒さうに眺める。

「まあお掛けなさいよ、冷わますから」

と薄い坐蒲團を持つて来る。

「お構ひでないよ。今朝は當番で不在なもんだから。老母は十時頃までお目覺めは

ないし、此間にあの話を一寸爲やうと思つてね」
あの話と云はれて花枝は厭な顔をしたが、それを見せぬ様にして竈の下を焚つけ

る。
「お忙しい中から毎度御深切にして頂いて」

と云つたが、氣の軽い世話好きの女ながら、此間から頻りに持つて来るあの話といふのには、有難迷惑を感じて困つて居るのである。けれども善い話にも悪い話にも此人より他に訪ねて呉れる者も無い心細い身の上には、厭な思ひを堪へても氣拙い顔は見せられぬのである。

「髪を又一度結つて上げやうぢやないか、いくら何でも餘り醒いわ」
と帯の間から手細工の刺繡の篋入れを取出す。

「彼の話先方は大變急いで居るのですよ。それと云ふのが誰だつてあなたを賞めぬ者はないだらう。其評判を聞いてイヨ／＼氣乗がしたのだね之は無理のない話さ。それで此方の事情も云つたのですよ、一人娘で嫁入するといふ譯には行かぬこと、

話すとね。それは承知の上だから何んな話でもしやうぢやないか、當今の間は其儘宅に居て貰つて可い、と斯う云ふのですよ。そしてお袋の世話から何から全部引受けて、早くあの苦勞が助けて上げたいとね、それは道理の分つた話さ。此の老齡になつて容色に何うの斯うのと云ふのぢや決して無い、あれ程の孝行娘が活地獄見たいな不自由な生計の底で病人連れて難義して居るのを、知らぬ以前なら兎も角、縁があつて知り合となつた以上見て見ぬ風は氣性として出來ない、それには女房に先立て何彼と不自由に暮して居るのだから出來る事ならあなたの世話が爲たいとまあ斯う云ふのさ』

とお安は奥の病人へ氣を兼ねる様に低く云つて花枝の顔を見る。

『これが色戀の何うのと云ふのならお母さんやあなたの氣心を能く知つて居る妾だから、決してお使者には立ちませんよ。何の金を貸すのは先方の高貴で、借りた物を返さんとは云ふまいし、云はゞ御客様だからねそれを恩に被せられる譯も枷に取られることも無いけれど、如彼云ふ商賈柄には似合はない精神の嬉しい人さ金は知

つての通り喰る程有つて居てそれに獨身者で氣兼要らずと來て居るから、話次第に依つては仲に入るのもあなたやお母さんの爲に幸福の基になりはすまいかと思ふものだからね決して可笑しく取つて貰つては困りますよ』

『そんな事があるのですか。御深切は能く解つて居りますよ』

花枝は斯う云つて竈の下を覗く。夜も碌々眠らぬのか、臉は赤く浮き腫れて萎れた花の痛ましい風情。

(二九)

世話好のお安が世話をしやうと云つて仲介に立た一件は斯なのである。

お安と懇意な男に塩谷武平と云ふのが居た。モウ五十幾つかの老人であるが稼業は金貸しで、それも性質の良くない方の高利貸であつた。靴を提てテクテク歩く姿は、無關係な者には少々因業かな、と見える外に大した特色の無い男であるが、其

首玉と同じに片時離れた事はあるまいと思はれる黒皮大時代の鞆の中へ、一度でも姓名の片らを納められた人間は、武平の姿を見ると震ひ上つて怖れた。或者は虐められた過去を思ひ出して、或者は死活の運を握られた現在に疎然として、途中では不浄のやうに避け、蔭でば此世の鬼と罵つた。雖然諸人の呪ひも怨恨も鐵壁に投げらるゝ趨の如く弾きかへされて、何の障りも怪我もなく、その名の音に響く強い健康な武平で何時までも居た。

お安が武平と懇意になつたのは矢張金が其間を繋いだのである。大きな所へも貸しつけるが小さな債務者も夥しう有つた。所謂からす金で朝な夕なに零細い利足を強請り取り撈りつて廣い得意先を憎まれて歩く。お安の夫たる巡查も一たび此高利貸に引罹つて酷い目に遇つたのであるが、署長の仲裁で證書を卷いたことがあるそれが妙な縁になつて武平はチョコ／＼訪ねるそしてお安の内職に貸金の周旋といふ仕事を授けた。妙めは厭と思つたが段段馴れるに従つて、足袋の小爪着けや襯衣の穴縫りよりも遙かに金儲けになつて骨は折れぬといふ味を覺て來た時折には菓

子箱の一つも置いて拜んで歸る人がある。一件に就てこれ／＼金額について、これ／＼といふ口錢はその度にキチンと武平が出した。それが積ると夫の乏しい月給よりか上越すことがある。洗ひ晒しの木綿衣しか着られなかつたのが銘仙位手を通し一件の用向に奥様風で外出が出来る。夫の巡查も官給の肌着に換へて毛のシャツが買へる様になつたのを溢面つくりながら歓迎した。こんな調子で今ではお安は武平の爲に、一廉の役者であつた。それで武平の姿は例の鞆と共に三日に上げすお安の家へ現はれる、それはナル可く夫巡查の當番の日が世間体の好いことを、之は夫の注文であつた。

斯な事でお安が金貸の周旋をするのを隣家に住んで芳枝母子は能く知つて居た。腹の悪い人では無いけれど、あの稼業の手傳ひだけはお安さんも廢めてなら可いのに、何と云つても諸人の怨みがかゝるから、と芳枝は眉を寄せて噂をしたこともあつた。が今では母子共お安の爲に急場を救はれたといふ恩恵は被らるゝ身とはなつた。それは此間の自動車の災難があつてからといふもの、芳枝は娘に三味線抱かへ

て門に立つ辛い夜の稼ぎを許さなかつた。すると生計の責苦は矢庭に逼る、搦て加へて芳枝の病は急に悪く變じた。花枝は何うする事も出来ず當惑の餘り心易い仲のおおに相談をした。先の苦勞よりも眼前の母に醫費を絶つといふ事が花枝の爲には堪へられぬ苦痛であつたか、ら高歩の金でも一時の凌ぎをつけるより他の手段を知らなんだのである。お安は樂々と承諾して二十圓の金を出した、無論武平の貸しつける高い利子の金である。型の如く證書を入れたが連帯の判人は求めなかつた。之は非常の恩恵であつて、お安が中間に立つて様々に骨を折つたからである、と本人の口から聞かされた。實際さうであつたらうと花枝は親切を喜んだ。返す期限は一ヶ月とは證書面にしてあるが、其時になつて工面がつかねば又何とでも相談する早く金を役に立て病氣を癒すのが肝腎だ、と之は武平からも傳言があつたとお安は語た。

此武平がお安に頼んで花枝を世話をしようと言ふのである。始めて次事をお安から聞かされた時、花枝は呆れて物を云ひ得なんだ。がスグ借りた金の事に聯想してゾツと身の毛を竦立てたのである。

(三〇)

闇夜があるから覺て居る位の威赫は耳が聳になる程聞飽いた鹽谷武平。法律といふ兎角弱い者には同情を有たぬ強い力に保護せられて、臆するところもなく大手を振つて歩いた。

「御免なさいよ」

と皺枯れた聲でヌツと入る。お安はいつもの通り愛想好く迎へて。

「お待ち申して居ましたよ、さあ萬望お上り」

「大將は出番だね、一寸上らせて貰はうかな」

と云ふ顔には、お安が待つて居ましたとかけた詞でニタ／＼と笑みが浮ぶ。

今日の武平は稼業の金ばかりで來たのではなかつた。

「大將も辛いナア」

と云ひながらゴツ／＼した縞の羽織の下から貴人を取出す。

「又大掃除を初めたからあれにも出んならんだらう。犬を退治ると云ふてあれにも
巡査が随いて居るな、大將も却々辛いナア」

「イエ此頃は亭主は内勤になつたので大變樂でございますよ」

「左様か。それは可い事ぢや」

と汲まれた茶碗を取上げたが、厚い唇をブチャ／＼と嘗めて。

「何うちやあの一件は。あんた骨を折つて見て呉れたらうな」

「エ、妾この二三日それに浸り切りですわ」

「あんたの事ぢやから如才なからうと思つて安心はして居るが、サテ手に取つて見
んことにはな、金を拜まんと證文が巻けんやうなもんぢや、はッは／＼／＼」

と笑つて。

「何ぢやな手答へは」

「さあその事ですよ、お目にかゝつて御相談したいと思ひましてね、お出を待つて
居たのですよ」

お安は火鉢を押すやうにして乗出し、聲を潜めた。

「一寸變物でねわ彼の娘が。あれで見かけによらぬ剛情な性質があるのですわ」

「フム、フム」

と武平は熱心に聞いて居たが。

「で何かの、結局絶望といふ様な事かね」

眉の邊りを暗くする。貸金を厳しく督促する時、斯な顔をするのをお安は度々見て
馴れて居る。

「イエそんな事はありません。絶望と云ふやうなそんな事はない積りですが」

と云つて我ながら曖昧な詞に周章る。

「妾キツト何します、其内キツト貴方のお好きになるやうに」

「左様引張られても困るな、厭なら厭で此方にも考へがあらうと云ふものぢや。實

際馬鹿氣切つた程憐憫がかけてあるのぢやからな。あなたの云ふ通りにして証文に連帯の判も取らずさ、金貸仲間の法に無いことをして居るのが解りさうなもんぢやないか」

「イエそれはモウ知つてる段ぢやありませんよ。御深切を喜んでね、貴方の事を神佛のやうに云つて有難がつて居るのですもの」

武平は襟られる様な氣持でニタツと笑つた。

「あの娘が左様云ふのかね。苦勞をしてる女ぢやから齡は行かいてもそれ位の事は解るだらうと思ふた」

と忽ち晴れやかな調子になつて。

「何ぢや、あなたの骨折で今日は一度逢ひたいものぢやが本人に」

「妾も左様して下さつた方が仕事が爲やすいと思ひますわ。呼びませうか」

「來て呉れるだらうな」

とモウ先刻の不機嫌は何處へやら。

CHII

母の寢息を伺ふた上、花枝は次の室で針仕事をひろげた。呉服屋からポツポツ持つて來る仕立物の注文が、今の母子の命を繋ぐ糧である。がそれも従前の半分も無く、病人の醫藥には何の引當もない苦し紛れに、目を閉るやうな思ひでお安の手で高歩の金を借りた。それは僅か二十圓程であるけれど、それだけが今では大金である。一ヶ月と切つた期限は後五日で盡る。その間には裁縫の註文も増して來て、何とかなるだらうと豫期した事は全で外れて了つた。何したものかど瘦せる思ひで居るところへ、お安からは思ひも寄らぬ情ないことを聞かされる。金を借りた鹽谷といふ老人が親切に世話を爲やうと云ふのは孝心を憐れむ天道様のお救ひだから、早く善い返詞をして此様塙から助かるのが幸運を捉まへるといふもの、と道理らしい勧めも初めから耳に蓋をして居るのであるが、面と向つては侮辱に等しいこの詞を

拒絶ぐことが出出なかつた。そして約束通り金の返せぬ時の切迫つまる運命へ斯して手を拱ねて進み近づくことかと、獨りで惱み悶て居る。

お安の親切に見舞ふて呉れるのが嬉しかつたのは其話の出る迄であつた。今は格子戸の明く音にも冷りと水を浴びせらるゝ氣がする。腹の善い人と想つたのは此方の見損ひか、母子が助けたさの真心づくから、唯一圖の取次ぎか。何方にしても結果は自分を呪ふ悪魔の誘惑である、そんな事に心を動かしてなるものか。

精神は堅く決めても乙女心の、世間や人の怖ろしいのが今更に驚ろかれる。

斯うして母子は何時まで虐まるゝことか、それから母に萬一もの變事があつた時まあ其時からの孤獨ぼつちの自分は何うなつて行く身の上か。

針の目も涙で分らぬ、何處の幸運の嬢さんが着る衣裳か、斯ういふ色が流行るのだらう、好もしい友染縮緬に、名高い畫伯の揮毫で裏地は一ばいに淡彩の春駒、來ん櫻狩の曠に飾らるゝ羽織だらうと思ふと、寂しい自分とは餘にかけ離れた世界があるのに驚ろかれる。

ホツと息して尺竹を取上げた時。

「花枝さん、花枝さん」

と低い聲は隣家のお安である。花枝は涙を拭いて起上つたが顔は愈曇る。お安は入りもせず格子戸を一寸ほど明けて。

「花枝さん、今手が離せるかね。あの一寸来て欲しいのだが、金の事ね、あれで妾相談して置きたいと思ふからね。でないと後五日だものねね」

「は直参ります」

とより他には花枝は返答が打てなかつた。厭な話に續くに極つて居るけれど金の事と云はれては行けぬとは斷られぬ。後五日の聲は耳に早鐘をつくやうに響いた。

母はよく寢入つて居るので、バタ／＼して隣家へ行くと、思ひもかけず。

「あの塩谷さんが恰度来て居られるのでね、一度逢ふてあなたから期限のところを頼んだら可いと思ふの、事情さへ解れば待たんと云ふ様なことを云ふ方ぢやないからね。一緒に坐敷へ行きませう、ナニ構ふもんかね、そんな風をして居たつて心に

二一一
鑄さ。あんたの其點に何して居られるのたものね、ほ、ほ、ほ、」
花枝はハツと思つた。斯んなことを云ひながらお安は長火鉢の銅壺へ爛徳利を浸けるのである。

(三三)

花枝は武平に物を云ふのは初めてである、繁々隣家へ出入する姿は見るともなく見て、擦れ違ひには會釋位はしたかも知れぬ。そして見るからに頑丈ないかにも高歩の金でも貸さうといふ人体の、何となく險しい點のある老爺だと思ふて居た。それが今宵は其人が酒を酌む座敷へ出て、初對面の挨拶やら金を借りたお禮を曰はねばならぬ破目になつたので、情なくも口惜しくも思ふた。厭な話さへ無かつたら此方から進んで禮に來なければならぬのであるが、今では恐ろしい敵の氣がして、酒の座なぞへは何としても出たくなかつた。それをお安に無理に引かる、様にして奥

の六疊の間へ連れられた時、初めて三味線持つて辻に立つた時よりも辛い悲しい思ひがした。

武平は傾けて居た盃を置く、喜悅と微酔とで悉く照り輝かせた顔を花枝に向け、その視線に立つた花枝は火で灸られる心地がした。

「お出たの、さあお坐り、は、は、は、は、」

と何の意味やら解らぬ笑ひをする。お安は間をつくらふて。

「一寸お禮を云ひたいと曰つては、ほ、ほ、ほ、さあ花枝さん此所へお坐り」

モウ此儘に去る譯には行かぬ、するだけの挨拶を済ます分のこと、花枝は度胸を決めた。

「此度はまことに御厄介になりました」

云ひ果たのを武平は盃持つた手で押へるやうにして。

「それは可ね、まあ一つ上げやう。折角御馳走になつて居ても獨酌では頓どな、は、は、は、」

「イエ妻は」

と出された盃を見もせず俯向いた。

「花枝さん、まあ頂く真似でもね」

「有難う、でも妾不調法ですから」

母の目覚めも氣になれば、この人と對つて居るのも辛く、花枝は早く歸りたいに
心は躍る。

「あの拜借したお金でございますか、期限は後五日になつて居るのですけれど、ツ
イ手違ひやら何やらで……萬一お約束に遅れる様なことがございましたら、まことに
願ひかねますけれどモウ一月だけ猶豫して頂きたいと存じまして」

脇の下にはタラ／＼と冷めたい汗、身の皮剝かれる苦しさも斯やと、耻辱を忍ん
で疊へ手をついた。

「は／＼は／＼俺は金貸が商賣ぢやけれど、商賣を離れての交際もしますぢや。何
もそんなことを憂慮するには及ばん。なあお神さん」

「ほ／＼ほ／＼花枝さんは正直ですから、そればかりを苦に病んで居るのですよ。

「萬望彼金モウ暫時待つて上げて下さいな、妾から、お頼みますわ」

「待つとも、待つとも、一月は一年でも二年でも待ちます、なあ花枝さん、金貸か
て世間の負乏人が云ふやうにそんなに因業なものでもないテは／＼は／＼」

「まあ面白いことを。オ、妾お銚子を忘れて居て」

とお安は急いで外室へ出た。

「お袋の病氣は何うだね、心配な事ぢやな」

「有難うございます、何うもはか／＼しうございませんで」

人なき室に對坐の居堪らず。

「では妾失禮いたします、萬望只今申上げたことを」

「これ花枝さん、まあ可わが。老人かてそないに嫌ふたものぢやない。金の話なら
何うでもして上げる。まだ要るなら出して上げやうさ。だから俺のいふことも
な」

と武平は猥りがましよう横に身体を曲げて突如に花枝の手を取り引寄せやうとしたそれを振拂ふて。

「何を爲さるのです」

と起ち上がる。武平は拂はれた力が強かつたので、機みを食つて踏めくと、膝を着の小鉢へ突入れる。

(三三)

血相變へて室外へ駆け出た花枝と、物音に驚いて臺所から飛んで来たお安は衝突る様に縁で出遇ふた。

「妾歸らして貰ひます」

と云ふ憤りを含んだ花枝の様子に、それぞとは大抵察したが。

「まあ何うしたのだよ花枝さん」

「イエ何うもしませんけれど……妾宅が気が入りですから」

「宅なら大丈夫、妾今見て来たのよ、お母さんは能く寝て居てだから」

と座敷の方を氣にしながら、此儘花枝を去なしてはならじと努める。

「まあ何だか知らないけれど、角が立つては面白くないわね。塩谷さん酒の上で何か戯談でも云つて？。ほ、ほ、そんなことだらうと思つた」

背中を手をのせて顔を覗き込み、扶けるやうにして勝手へ連れて行く。

「まあお坐りよ、これで歸つたら角が立つて彼の方を怒らせることになるわね」

「怒つたつて構ひません、失禮な……」

と花枝はまだ鎖まらぬ胸の動悸を押へて立つた儘で居る。

「だつて今塩谷さんを怒らせたら拙いちやないか、ね左様だらう、そんな拙手な事をして求めて苦勞を爲なくつたつて可いわ」

怒らせて拙いことは知れ切つて居る、がそんな事を考へて居られる場合では無かつた。懸命の力で逃げ了せたからこそ、あの儘捉まつたら荒鷲の爪の下なる小雀の

運命！、今頃どんな憂目に遇ふて居ることやら、とそれを思ふと此處に居るのも不安に堪へぬ。

「だつて餘りなことを……」

「さあそれが一寸飲酒つて居るだらう、ツイ戯談半分に調弄なすつたのを眞面目に取つて怒つては可けないわ。妾悪い事は云はないからまあお坐りつたら」

お安の所爲にも腑に落ちぬことがあるので、詞を交すのも腹立しく蹴立ても歸りたいのであるが「今怒らせては拙い」と云はるゝ一言は鋭く胸を刺すのである。眼の前に逼る返金の期限、それを猶豫して貰ふべく頼み込まねばならぬ境合に、其人を怒らせては願ひの叶はぬは定である。漸次に心の鎮まるにつれ、激した情の火は弱く、智慧の光りが明るくなる「求めて苦勞を爲」たくは無い、せめて母を見立るまで、モウ此上の苦勞は見せたくないのである。

強て坐らせて長火鉢を中に、お安は花枝に對つて諄々と口説き立て……武平の云ふ儘になれば、今の貧苦は拭ふが如く消れて、好き放題の歡樂が出来、幸福の運に

乗つて路次の奥から一走飛びに華やかな世間へ明日の日からでも出られる。假令一身の榮華は望まぬにしても、危ぶまるゝ母の病氣に思ふ存分の手當も出来る、子として此の上越す孝行はあるまい……と云ふ意味を巧な詞で説勸めた。花枝を説伏ると否どが自分の身上に大した影響があるのだからお安は一生懸命の辯口を振ふた。花枝は、黙つて聞いて居た、そして今宵自分を招き寄せたのは全く武平とお安が腹を合せての謀計であつて、酒の座興に紛らせて手籠めにでも遇はす了簡だつたらしいといふ事を覺つた。

「妾その事はお断りを致します。拜借したお金と其事が一緒になつて、仲間立つたあなたがお困りになる様な事なら、妾何うでもしてお金は期限までにお返しします」

と血を吐くやうな聲で答へた時、お安は左も落膽した調子で、詞まで改めて斯う云つた。

「此上強てとは云ひますまいがね、まあモ一度能く考へ直して御覽。期限と云つて

も後五日だもの、引當さへあれば何も云ふことはないけれどね」

(三四)

厭な交渉を断然と断ると同時に、後五日に逼る二十圓の債務は、期限までに奇麗に返すと云つて、芳枝は虎口を遁れる思ひで我家に歸つた。まあ一度熟考へ直して御覽、決して悪い事不利益なことは云はぬから、と繰返しお安の詞を後に、その門口を出る時は精神は昂奮つて居た。腹が立つて口惜しくつて、零落に乗込む他人の侮蔑に齒をキリ／＼と噛んで泣いた。

頭腦は火のやうに熱く、枕にひやくほど顛顛に烈しい脈が打つ。寝たやら寝ぬやら。曉方に武平が洋剣さげて執達吏と共に自動車で来る、藝妓姿の母が泣き叫ぶやら、父の顔が現はれて笑ふやら、滅裂の夢を見て汗塗れで目が明いた。

昨夜の事件は悪夢よりも情なかつた。壁一重の隣家が地獄の心地で、モウ此路次

の奥も母子の身を置いて呉れぬかと心細い。

朝日影は涙の家にも眩く射した、潔い雀の聲も聞える。花枝は屈托れる心を我と勵まして、朝の食事もそこ／＼に母の看病に従ふた。此二三日は頻りに眠りに落ち目が覺めて居るかと思ふとそれが夢現で、判然した中に取止めもない詞が交る。神經性心臟病で、脈搏の高まるのと胸臍の痛が急に來るのが恐ろしいと注意された醫師の詞に油断せず、寢息にも耳を聳て寢返りにも伺ひ寄つた。看護の力が病の七分を癒やすと聞いている自分の身體は碎けても骨を折つた。其甲斐か藥効か、兎に角安静な状態の寢姿を見ると、胸の鬱塊が少しは解ける。粥湯を持つて行くと微に目を開いて。

「今日は好いお天氣のやうね、寒威も薄しぢやないか」

と障子の日影を見花枝の顔を見る。衰弱は加はつて目は鈍く落凹んだ。

「エ、好いお天氣よ、お天氣が好いと氣分も快でせう」

「左様だね」

「モウ春よ、ねねお母さん、梅も咲けば櫻も直だわ。病院の玄關に彼岸櫻の見事なのが生けてあつてそれは美しいのよ。お母さん早く癒つて頂戴、今年こそ向島へ行つて見ませうね」

花枝は活々とした調子で云つた。

「左様だね、東京に居て名所の花を染々見たことも無いのね。けれどモウお母さんお前と一緒に花を見る事は出来ませうまいよ。今度は何うも自分で可けない様に思ふからね」

「又お母さんそんな事を、そんな弱いことを云つては厭よ。お醫者が左様云つてるぢやありませんか。以前よりズツと見直したから、暖かくなるに従ふて屹度善くなるつて。それにお母さん自身がそんな弱い氣では癒る病氣も後戻りをするわ」

芳枝は屬まして呉れる娘の顔から凝と目を離さず、粥湯に舌を濕ぼす。
「妾だつてお前の氣を折る様なことは云ひたくないがね。今お前を孤獨にして死んで……死んだつて妾往く所へは行かれません」

「お母さん、モウそんな話止ませう、そんな話」

と花枝は身慄ひする様にして云つた。

「だけど一度は云はなければ……能く云ふて置きたい事があるのだからね。今日は氣分も快い様だから……」

「お母さん、その話つてお父様の事でせう。お父様の事なら妾モウ能う諦めて居てよ。だからそんな事に氣を疲らせないで」

「お前お父様の事を諦めたと云ふの？」

芳枝は詞に力を入れて問ひ反した。

「……だつて諦めなければ……」

と花枝の語尾は微に消ぬる。

「諦めやうにも何うしやうにも、肉親の縁は切れるものではありません、お前が自然にお父様の邸へ引つけられたのも、皆な縁の糸がする業だよ」

花枝は「エ」と云つて母の顔を見た。眞島の家へ連れられた事は、堅く秘めて居た

のであるから、何うしてそれを母が知つたかと驚き感ふのである。

(三五)

病の上に苦悶を加へまじと、彼の災難の夜に計らず父の邸へ連れられた事は母には堅く秘め隠して居た。唯名も知らぬ紳士の家で手厚い介抱を受けたと云ひ拵へて置いた。それを母が知つて居るので花枝は呆れ感ふと共に、知られた以上打明けて告げねばならぬ一部始終が、いかに母の心に刺戟を興へることかと悲しく思ふた。
『駿河臺の眞島といふ邸へ連れられたのだと云ふことを、彼夜から二三日経つてお安さんに聞きました。其時妾は肉親の縁の恐ろしいのに驚くと同時に、これも全く神佛のお引合せで、お前の出世の途が開けるのだと思つて、何んなに嬉しかつたか知れません。手紙を出してお前の將來を相談しても返事も呉れぬ様な邪慳な父親でも、眼の前に大きく育つたお前の姿を見たら、冷い心を温かくなつて、妾は捨て

お前だけは拾ひ上げる氣になるだらうと思つてね。それからと云ふものは、お前が何を云ひ出すか、向ふから何かの沙汰があるかと、そればかりを妾は待つて居たのだよ』

自分が此儘で亡くなつたら、孤獨になる娘の運命の痛ましさが思ひ遣られる、それが死んでも死ねぬ執着である。息ある中に何としていも父親との縁を繋いで置かねばならぬ。と芳枝はそればかりに重患の身を悶て居るのであつた。

『妾は其當夜の事が聞きたいのです、花枝お父さんに逢ふた時の様子を詳しく話してお呉れ。先方は五つの時に別れた限りで覺て居る筈はないけれど、お前の姓名も住所も知つて居てのだから』

母は急きかゝるやうに質ねた。花枝は黙つて俯伏して居る。

『其當夜の事を聞いた上で、妾はお前のために爲て置かねばならぬ仕事がありますそれを爲ない中は……それを爲遂げて置かなければ、妾此儘では目が瞑れないのだよ』

漸次に精神の昂奮を示す詞の調子、息は苦しげに續けさまに促した。俯向いた花枝の際に涙の雫が落ちる。それを見せまじとしたが病人の神経は鋭くなつて居る。

「花枝、お前泣いて居るの？、わ、泣いて居てのだね」

「お母さん」

と云つて起した顔は濡れて居る。

「妾お父様に逢ひました。始めてお父様の家へ行つて……お父様のお聲も始めて聞きました」

「そ、そして何だつたね。お前の方から名乗つて？、わ、先方から何か尋ねて？」

「妾お父様と知りながら、名乗らずに歸つて参りました。あの邸を脱けて歸つたのです」

「わ、名乗らずに脱けて」

と芳枝は思はず枕に支へた手を滑らす。

「お母さん、妾お母さんの心は能く解つて居ます、倚頼の無い妾の身体にお父様を

力に爲せやうとして下さるお母様の慈悲は……妾嬉しいとも有難いとも……それを知つて居ながら折角逢ふたお父様と名乗らずに歸つたのは……」

其夜の光景を現々と、あの太い強い父の聲で、女乞丐と罵られた、あの聲は今も耳の底に残つた。

「お母さん、妾にも意地を立てさせて下さい」

と花枝は堪へず疊に俯伏した。

(三七)

「妾にも意地を立てさせて下さい」

と云つて泣き伏した花枝は、漸く顔を上げると、涙を抵いて母に對つた。

「お母さんに餘計な心配を掛けまいと思つて、彼の晩お父様の邸へ運られた事は妾隠して居たのです。狭い小路一ぱいに塞いで、立派な自動車が不意に來たものです

から、避ける間もなく衝突つて……それから後の事は知らなかつたのです。夢うつに人の聲がして……卑しい女だの……それから女乞丐だのと……」

「そ、それはお前の事をかい」

と芳枝は病苦を忘れたものゝやうに身体を起さうとした。

「卑しい下等社會の女藝人だと云ふ聲が判然聞えてそれから氣がついたのです。立派な座敷で妾は寢臺に寝させられて」

「花枝、お待ち、その……お前の事を卑しいものだの女乞丐だのと云つたのは、一體それは誰が云つたのです」

「お母さん、氣のつくまで妾の傍に居た人は……妾が逢ひたいとく思つてゐたお父様です」

「オ、お父さんが……お父さんが獨りでかい」

「イ、エあの喬子さんと云ふ方でせう、お嬢様の方と兩人で」

「そして誰がそんな罵詈雑言を言ひました」

「……それはお父様と嬢さんの聲で。妾聲が耳に入つて目を開けた時は、入口にお兩人の後姿が……」

「ではお父さんとあの喬子さんの兩人で、お前の事を女乞食と云つたのだね」

「だけどそれは無理ありませんわね、妾の此扮装で……門藝人に違ひないのだから。あそこらの方から見られたら卑いとも怪いとも……それは妾何ともなかつたのですけれど」

芳枝は胸に手をやつて、ホッと深い息をついた。

「すると先方はお前だといふ事を知つては無いのねね、お前といふことを知つてからでは無いのねね」

「それは妾名乗はしませんもの。氣がついて女中から聞いて、初めてお父様だつたことを知つたのですから」

「それからお前何うしたの」

「お母さん、妾スグ後から追ひついてお父様と云ひたかつたのよ、お父様と云つて

「絶りつきたかつたのよ」

泣くまじとすれど涙は止まらぬ、雨の如くに膝に落ちた。

『さうしてお母さんの身上を……病氣の事やら何やらを打明けて話をしたらと思つて、すでに行きかけたことは行きかけたのですけれどね。女乞食と云はれても仕方のない服装をして……又左様思つてらつしやるお父様や嬢さんの前で、いかにしても妾貴方の娘ですと云つて名乗ることは出来ません……お母さんが意地を立て、辛い中で妾を斯んなに大きくして下さつたのに、お父さんの耻辱になる様なことをしてはならぬと思つて……お父様のお座敷に近いらしいツイ其處の廊下までは行つたのですけれど、其場から脱けて歸りましたお母さん、妾モウお父様の事は能う諦めました。今の境遇で名乗つてはお母さんも妾も意地は潰れて了ひますから』

芳枝は両手で顔を覆ふて、苦しい煩悶に潜々と泣いた。

『花枝、妾はその意地を捨てました、妾には其意地を捨てさせてお呉れ。何う考へてもお前を孤獨にして死んで行くことは出来ないから』

親は子の爲に、子は親の爲に、捨てるに憂く捨てざるに憂き人の世の意地に泣いた。

斯かる昂奮の状態からも、芳枝は直に夢現の境に入るのである。

ウト／＼とするのを覗いて置いて、花枝は次の間へ立つた。坐敷では精神上的の悲痛勝手元に来ると生活の苦惱が形體になつて犇々と逼る。薄い粥湯の米さへ不自由で明日病院へ拂ふ薬價が足らぬ。恐ろしい塩谷の返金は後モウ四日となつたのである。

物資の乏しい臺所に佇つて、花枝は茫然として乾枯らびた四邊の光景を見廻した。格子戸の外には屑屋の聲。

(三十一)

『屑屋さん一寸』

と低い聲、近所を憚るやうに、そつと格子戸から顔を出して呼び止めた花枝は、急いで手招きをして置いて引込む。痘痕面を日に焦した、目の光る男が肩の籠を下しながら入つて来た。

「へい今日は」

「あの、一寸待つて下さい」

と奥に入つた花枝は、暫時すると一挺の三味線を提げて出て来る。

「へッへ、、何かお拂ひ物で」

屑屋は妙な笑ひやうをして腰を屈めながら、頻に家内の光景を見廻した。

「此品賣りたいのですがね」

「へいの三味線で、頂戴します。他にも何かへッへ、、」

置れた品に目を注げつゝ、板の間に腰をかける。

「イエ他には何も。此品見て下さい、不用になつたから賣るのだけれど、まだ何もなつてはしないから」

「へい、この三味線といふ奴がね」

と紫檀棹に花欄胴の、時代らしい三味線を取上げる。

「頓ど時勢遅れの物でね、へッへ、、」

斯云つて轉手を覗き、胴を指で二三度弾いた。カン／＼と物寂びた音に噓る。

「あれ」

と云つて花枝は奥の間の方を振向き。

「病人があるから静かにして下さいよ」

「へ御病人で、左様か、それは可けませんね」

三味線を置くと貰入れを取出し、煙脂で詰つた煙管を火鉢の椽で荒く叩く。

花枝は母の目覚めぬ間と氣を焦つて居るのであるから。

「あの、買ふの？買はないの？」

「へい、イエ戴くのは何品でも戴きますがね」

「何程位に買ふの、餘り安ければ止ませう」

「何程位と云つてへッへ、、、斯な物は賣る方では何ですが、私の方では買ふて頓と儲からぬ代物ですからね、他に何か一緒にお拂ひになる物はございませんか」
又しても同じ事を云つて、薄氣味の悪い底光りのする目で、この荒世帯を讀むやうに四邊を眺める。花枝は厭な男を呼んだと悔いた。

「では買はないのね。他には何もありませんから、それではお邪魔だつたけれど」と三味線を取上げる。屑屋は周章氣味で、火のついた煙管で立ちかけた花枝の袂を押へるやうにして止めた。

「買ひますよ、買ひますよ、へッへへ、、、戴きますが。まあモ一度見せて貰ひませう」

再び棹を握つて、今度は天鷲絨の胴掛けを外して見る。

「橙だね、せめて材でも良いとね」

「ほ、ほあんなことを。花欄だわ、それ良い三味線ですよ、よく見て御覽」

「へッへ、、、花欄だつて、張り物もあるからね」

「そんな粗品とは違ひます、見たら判るわね」

屑屋は、黙つて海老尾から根尾の邊りまで凝と眺めた。

「さうですなア、何程なら賣らうと云ふのですね」

「お前さんの方で云つて見て下さい」

「まあ五十錢ですな、五十錢なら戴いて置ませう」

花枝は呆れて屑屋の顔を見た。

(三八)

唯一棹の三味線が、音曲教へる家に寂しう残つた。モウ賣る物も入質るものも盡て了つて、風前の燈火に似た母の命と共に我家の最後かとも思はれた。飢餓に逼ることも醫藥は絶つまじと、夜の目も合さず裁縫仕事に努めたが、些少づゝ入る賃金では高歩の利息にも足りぬのである。

眼の前に明日の病院の拂ひがある。武平にも利息を入れて延期を頼まねばならぬあの事を根に持つてそれを肯入れて貰へぬ時は其時のこと、此方が盡す手段はこれより他に無いと、斯考へた花枝は、消ゆる火に加へる最後の薪を求むべく家中を探したが、金に換ゆべき品物は無い。

フト想ひ出したのは三味線である。花が手馴れの世渡る道具も、今の場合には代へられぬ。京の名工の手に成つたもので、母がお座敷を勤めた時代からお師匠の此頃まで持傳へた品である。

母に萬一もの事があつたら、何よりも尊く残る僅た一つの遺品である。之れを賣るには忍びないがそれよりも大きな苦痛が差逼る。情ないとも悲しいとも、譬へやうのない心持でそつと取出したせゝらぎと銘打たれた三味線の重さは鐵か石かと肝に徹へる。

それに苦もなく五十銭と値踏みした、屑屋の顔を呆れて見て居ると。

『五十銭なら張込んでるのでせよ、何うも斯な物は買ふ方でまことに迷惑でねへッ

へ、へ、へ、

『迷惑なら止ませうよ、そんなにして買つて貴はなくても可いね。妾の方でも五十銭や一圓には賣れないから』

腹が立つ儘キツパリ云つて、再び三味線を取上げる。

『そんなら何程なら賣らうと云ふんだね』

屑屋の聲は險しかった。

『いくらと云つて凡そ相場があるわ品物相應のねわ。そんな疎末な品物とは違ひますよ』

『だから何程なら賣らうと云なさる』

『三圓より以下では止めませう』

『ウワツ戯談ちやア無い』

其儘去くかと思ふと、納めた煙管を又抜いて悠々と吸ひにかゝる。足を重ねた股引の穢い縫接にも、今更惡氣に見ゆる怪しい風体の屑屋である。

「値が合はなければ仕方がないわ。お邪魔だったけれど」

「オイ姉さん、人ウ馬鹿にしなさんな、お前さん達に馬鹿にされるやうな屑久ちや無いせ」

忽ち荒い詞と變つて、煙管の先で火鉢を引寄せた。

「賣らぬ物なら始めから人を呼び込まないが可いや、道樂に籠を擔げて歩いてるのちや無いせ」

「ほ、ほ可笑しなことを。賣る積りだからこそ見て貰つたのですよ。だけど値が出來なければそれ迄ちやないかお邪魔だったけれども又何か……」

「厭だ、是非とも其三味線を俺が買ふのだ、此方へ貸しなさい」

突然手を伸ばして引奪る。

「何をするんだよ此人は」

花枝は驚いて押へかけたが、強い力に甲斐が無かつた。

「お前さん賣らないといふものを無理に持つて行かうとするのだね。他家の内の物

を奪つて行くのだね」

「何を」

と冷笑ひつゝ屑久は土間に突ツ立つた儘、首にかけた財布から五十錢銀貨を一つ取出して板の間に置いた。

「盗賊ちやあるまいし、確と相當の代價は置いて行きますよ。異存なしに放しなさい」

無法極まる所爲と詞に、花枝は赫となつて。

「斯な物要りません、それお返しなさい」

劇しく云つたのを耳にもかけず、三味線さげて出やうとする。遣らじと土間に飛降りた時

「今日は」

と勇ましい聲、格子を威勢よく引明け一人の若者が顔を出した。

此界限を得意場にして肴を商ひに来る藤さんと云ふのが居る。肴が新鮮しいのとあたらしい肴を生かして、俎の上で跳させる様な活潑した商ひ振を愛せられて、魚藤とした印半纏は家々に歓迎された。いなせな風で初鯉に走つたりする勇み姿は魚河岸の氣分を現はして嬉しがられた。

魚藤は例時の調子でグワラリと格子戸を引明け『今日ア』と花枝の家を覗いた。覗くと共にオツと云つて出した顔を後へ引いた。無法な屑久が三味線抱へて出やうとする所であつた。

『オ、魚藤さん、その人捉まへて下さい、捉さへて下さい』と花枝は大きな聲をした。魚藤は狭い格子戸の入口へビツタリと身體で垣をつく。後からは跣足の花枝が追廻つて確かりと袂を掴んだ。

『何、何うしたんで』

『此人物を奪つて行くのよ』

花枝は息を強ませて云つた。

『盗賊？奴ツ』

氣の早い魚藤は斯う云つた時は、モウ石でも握り締さうな堅い拳骨で屑久の横面を蹴りつけて居た。

『何を』

と云つたが目が眩んで、踏めくと奇麗に尻餅をつく。其手に持った三味線を引奪り。

『太い奴だ眞晝間に』

と二度目の腕力を脳天から打ち下さうと拳を高く振りかぶつた。

『待つて下さい、それさへ戻れば可いのだから、怪我があつては』

『ナアニコんな奴ア』

相手が女ばかりの家で、強奪りを働く憎い賊と一圖に怒つて蟲が承知せぬ。
「他にまだ何か奪つてるに違ねわねサア悉皆出しあがれ、エ、出さねな」と睨みつける。

「俺を盗人と云つた、な泥棒と云つたな」

屑久は尻と頬を押へて起上る。

「何をツ、盗人に文可があるかッ」

「手前の目には此商賣道具が見ないのだな。鑑札を持った商人様だぞ」

と云ひつゝ、傍に轉がつた籠を拾ひ、落ちた秤器を取り上げると、それを構へて擬

勢を見せたが、足は少しづゝ後へ退る。

「應對づくで俺が買つて行く代物を何うするのだ、手前こそ泥棒だ」

「まあ彼んなことを、誰が五十錢で賣らうと云ひました。賣らぬといふのを無理に引奪つて。女ばかりだと思つて馬鹿にお爲でないよ」

手に持つた銀貨を足元に投げつける。

魚藤は合點して。

「醒い野郎だ、盗人も普通のちやア無ね強盗だ。屑屋に化けて入り込むのでさア。

オイ文句があるなら交番で吐せ、突出してやるから左様思へッ」

「あの、品物が戻ればモウ可ござんすから」

花枝は事を好まず穩便に濟ませやうとした。

「手前も肩に荷をのつけて歩く仲間ちやアないか。何も横から出張つて俺の邪魔を爲なくても可いちやないか。金を渡せば代物は此方のだ。渡して呉れ、よ、渡して呉れ。餘計な世話を焼かなくつたつて可いちやないか」

屑久は忽ち態度を變へた。そして足元の銀貨を拾ふて竈の椽に置くと、懲すまに

魚藤の持つた三味線を取りにかゝる。

「この野郎ッ」

氣負ひに生きる若者は赫と怒つた。叫ぶと共に打据ゑる。撲れても屑久は三味線を離すまじと争ふた。

狭い土間で劇しい格闘が初まった。屑久の力は若い元氣の張切れるやうな魚藤に及びもつかぬが、それでも毆られても、蹴られても三味線を捉へて放さぬのである。花枝は事の成行と病人を驚かすのを氣遣ふて、危々しながら制止にかゝる。

「執願い野郎だ、奴ッ、これでもかッこれでも放さねわかッ」

ボカ／＼と打つ音。屑久の身体は大木に絡みつく葛のやうに、片手では三味線の棹を握り、右の手は魚藤の帯を掴んで、グル／＼と輪に振られても退かなかつた。

「エイ面倒だッ」

と魚藤はモウ目の眩む頃を確かに眉間を打下し、呀ッと云つて緩む手を逆にとつてめぢいせる。其時最後の執念のやうに掴みかゝらうとした屑久の手が、三味線の

胴に激しく當ると、皮は無残に裂けて破れた。

「ヤッ破りあがつたな」

「驚いて引く機みに破れた皮の裂目から何やらバツタリと地に落ちた。そんな事には氣も付かず憤怒の頂上に達した魚藤は河岸で鮪を引するやうに、モウ反抗ふ氣勢もなく、倒れて唸く屑久の身體をズル／＼と入口の所まで持つて行き。

「警察へ渡す奴だが、これで堪辨して遣らア、キリ／＼失せあがれッ」

と戸外へ突き出し、籠と秤器を抛つて戸を閉めた。

「濟みません、飛んでもない御迷惑をかけて」

と花枝は禮を云ひつゝ、表を覗く。屑久の姿はモウ見わなかつた。

「他に何も奪られなすつた物は無いね、野郎太い奴だ」

手拭で塵埃を拂ひ、脱いだ片肌を急いで入れたが、心持の好い程惡漢を取挫いだ勝利に満足の微笑が血色の良い顔に輝くやうに浮んだ。

「モ少時で取つて行かれる所でした、有難うよ」

心からの感謝を述べる。魚藤は手を振つて。

「禮なんか云つちやア可けません、當然でさあね。時に御病人は何で、ねお悪い？
そいつア心配だね」

「それでは困つて居るのですよ」

「寒いのが障るんだね、壯健な者でも犯られますからね。俺も感冒で五六日寝て漸
と起きたところで」

「道理で此間から些とも見わなかつたのね」

「お得意先へ不自由かけて散々叱言を喰ひましたよははははは」
苦の無い笑ひに氣心も透き通つて見ゆるやうな男である。

「一體此三味線を何しなすつたんだね。彼な野郎を相手にして」

花枝は賣りかけたのだとも云ひ兼て一寸躊躇ふた。聞く方では無頓着で。

「賣るのなら門に來る屑屋なぞに見せたつて可いね。俺なぞには判らねわが此品
は大分良い三味線だね」

「モウ不用になりさうですからね、有つても邪魔だから賣らうかと思つて……」

と後は云ひ淀んで、極り悪げに今の騒ぎに土間に蹴散された下駄を直しなぞする
その目先に落ちて居る小さな紙包を。

「あ、今三味線の胴の中から何か落ちたと思つたら」

「破りあがつて、忌々しい野郎だ」

(四一)

小さな平つたい紙包の中には何か堅い重味のある物が封じてある。そして其表面
には薄墨の文字で二行ほど記してあつた。花枝は之を讀むと忽ち顔の色を變へた。
思はず「あら」と云つた驚異の聲に、上り框に腰を掛けて三味線を弄うて居た魚藤は
屑久が取つて返したのかと起ちかける。

「何う爲なすつた」

「イエ……あの古い書付が」
と云つたが花枝は夢見る如き顔で身動きもしないで居る。紙包の文字は斯う讀まれた。

花枝の初誕生の日、祝ひの印に封じて贈る、……父浩造。
僅に二十字餘りの細字であるが、花枝の心は劇しく刺戟された。これぞ無情の父
眞島浩造の手蹟ではないか。

驚くと共にスグ疑惹の念が湧く。これに封じられた物はそもそも何であらうか。

贈るとわるからは父から母への贈り物であらう。がそれが何して三味線の胴の中
に入つて居たのだらうか。

繰反して三度も五度も讀んだ。初誕生の日……父浩造……。夢の中にも嘗てこれ
程の懐しい追懐を誘ふ機会はなかつた。悲しい運の星を握つて此の世に生れた一つ
の齡に、今は顔見るさへも自由ならぬ父なる人からの贈り物ではないか。

花枝は座敷へ上ると、人の居るのも忘れたやうに、奥の間へ駆け込まうとしたが

躍る心を漸く制して。

「あの一寸待つて下さいよ、スグ來ますから」

と魚藤に會釋して急いで母の病床へ行つた。今の騒音が驚かしは爲なかつたかど
心配したが、深い眠りからまだ覺めずに居た。

「お母さん……お母さん」

起さぬ方が可いとは知つても、これが起されずには居られかつた。

「お母さん……あの一寸」

芳枝は微に目を開くと、鈍い目で四邊を見廻して。

「ア、又夢だつたね」

とホツと薬臭い息をついた。

「お母さん夢見たいなことがあつてよ。ほら此品御覽」
と紙包を手に渡す。

「こら何。何なの？」

「そこに書いてあるのを読んで見て下さい」

「……妾にはモウこんな細かい字は読めません。何と書いてあるの、お前読んで聞せてお呉れ」

「お母さん、それお父様の手よ、お父様の直筆よ」

「わお父様の？、あのこれ手紙かい。手紙が来たのかい」

衰へた聲調が急に勢ひづき、霞む目を擦つて疑と熟視める。

「イエ手紙ぢやないけれど……妾の初誕生の日に、お父様からお母さんへお祝ひの印に贈ると書いてあるのよ。そして何か包んであるでせう、堅い物が」

「お前の初誕生の日に？。花枝、妾お前のお云ひの事が何だか……妾目が覺めて居るのだね」

「ほ、ほお母さん夢ぢやないことよ。妾よ」妾判つて居るけれど……お前の誕生の日にお祝ひだつて？」

「はあ其品にさう書いてあるのよ」

「そして誰が持つて来たの」

「オ、妾話の順を」

と花枝は三味線の胴の中から其品が出たことを告げた。

「エツ三味線の胴から此品が……此品がかい」

芳枝は恍惚として再び紙包を見入つた。

春や昔、花枝を産んだ頃であつた。濃い情交の眞島浩造から、生れた子供の祝ひにとせ、いらぎと銘折つた三味線を贈られた。その時の記憶が今おぼろおぼろと夜の明けるやうに芳枝の頭腦に浮んで來るのでめる。

(四二)

二昔の二十年前、眞島浩造が京の祇園で東京のお大盡と持囃されて、盛に豪遊をした。其時寵愛した藝妓お芳の腹に子が出来た時、金に任せて雜作もなく落籍して

妾宅に園ふた、其頃の事である。

京の商用が濟んでも歸東らうとはせず木屋町の宿を空虛にして、浩造は毎日芳枝の本名に復つたお芳の許へ入り浸つて居た。

一本の花欄櫻が京洛の春の夜を賑して圓山の麓に人の山を築く彌生の初めであつた。都踊の大提灯が赤い團子印を細手の空に輝かせる、古風な都囃を燃わ立つ友染の衣裳に載せて、加茂川の小雑魚見たいないたいけな姿で舞妓が花見小路へ急ぐ。四條の橋は八阪神社の樓門に吸込まれる、群集で轟々と鳴つた。其夕暮に眞葛原の料亭で風雅た宴會の歸路を、例の如く浩造は芳枝の妾宅へ入つた。微醉を物足らぬと湯豆腐の小鍋立に清水焼の盃を摘んで、大方ならぬ機嫌酒の折であつた。乳母に抱かれてスヤ／＼と平和な夢に遊ぶ嬰兒の顔を覗き込んで、チヒリ／＼と傾けながら。

『初誕生のお祝ひは何にしやうな、なあお芳』

浩造は何時までも勤て居た時の藝名を呼んだ。何かにつけて素人になつても廓の

氣分の脱けぬ様にあるのが浩造の嗜好であつた。芳枝はお芳と呼ばれるのを辛く感じる程、急に世帯染で母親らしくなつた。そんな事が後に浩造の情を冷めたくした原因かも知れぬ。けれども生れた子供の爲にはまことに此上もない慈愛の濃まやかな言分のない良い母であつた。

『左様ですね、何か後になつて此子の質素になるやうな物にして下さいな其方が可いわ。今はモウ足りて居ますから』

『は、は、は、急に考へが質素になつて來たな、お母さんらしいことを云ふ』
と浩造は笑つた。

『は、は、だつてお母さんに違ひありませんもの』

『では何にしやうかな、東京へ歸つてから趣向して送つても可いが』

貴郎そんな大層な事を爲ないで』

お芳は一寸考へて居たが。

『妾註文しますわ、あの三味線を一つ拵へて置いて遣つて下さいな』

「三味線を？、この子にかね」

「はあ、此子の役に立つまでは妾持ちますわ。妾従来のを其儘は厭ですもの、何だか氣が咎めるやうで」

「それなら別に拵へさしたら可いちやないか。子供が三味線持つまでには大分年月があるからな、ははははは」と堪へられぬやうに笑ふ。

「イエ妻が遣ひ馴らして置いたら、又妾の遺品にもなりますから」

「オイ、戯談ぢやないせ、何處に初誕生の祝ひと遺品分けを一緒に云ふ奴があるものか」

「ははは、でも後の利益になる様な物にして欲しいと思ひますから」

「諾、それぢやお前の註文通三味線にしよう。一番趣向を凝した三味線を註文しよう」

斯んな對談があつて數日の後、其頃京で名工の評判があつた細工師の家から一棹

の三味線が届いた。それに就て浩造は斯う語つた。

「此品には能く鳴る様に呪禁がしてあるからな、胴の中に呪禁の品が納れてあるからな。花枝が大きくなつてこれが弾ける頃になつたら役に立つ趣向ぢや。皮を張り替へる時氣を注げるが可いせ」

其頃廓に面白い事が流行つた。それは三味線の胴の中に金氣の物を要れて置くと思議に絃の音色が冴わるといふので、これを持つ稼業は伊達のやうに目に見えぬ贅を誇つた。

其後芳枝は浩造に捨てられ、慰樂に持つた三味線を母子の生計の爲に抱へねばならぬ身の上になつた。が件の三味線は家の秘藏としてナル可く不斷に使はぬ注意をした。

憂き歲月の生活の苦惱にありし昔の事は幻影よりも薄くなつた。二十年前の春の

x x x x x x x x

夜語りを、芳枝は忘るゝともなく忘れて居た。それが今の花枝の詞に、漸次に明瞭と……、忽ち悉く想ひ出された。

『花枝、花枝、此品が三味線の胴の中に張りつけてあつたのだね。これはお父さんの事です、お前早く此包開けて御覧』

花枝は云はるゝ儘に紙包の封を破つた重い平たい物はバタリと疊に落ち、火鉢の側に當つて鈴々と佳い音に鳴つた、それは凡そ二十枚ほどの黄金の延片であつた。

(四三)

時價にしておよそ百圓の黄金の塊が三味線の胴から出た。芳枝は古い記憶を探ぐり、花枝は眼の前の奇しき出来事に驚いて、母娘が共に顔を見合はせた。

板挟みのやうに追る貧の困苦の中へ黄金百兩の出現はまことに天から降つた幸福である。併し花枝は其幸福よりもモット大きな黄金にも財寶にも換へられぬ物

が手の入つた喜悦を感じずには居られなかつた。黄金の包んであつた紙片には、父の自筆で自分の初誕生を祝せるといふ意味の文句が明かに書いてあり、父浩造とさへ名前が確かりと署名であるのである。これぞ自分が直接浩造と父子の關係である事を證明する何より確實な書付ではないか。僅た一つの証據の記録ではないか。

花枝の初誕生の日、祝ひの印に封じて贈る。……父浩造。

花枝は繰返して讀んだ紙片から、黄金よりも尊い美しい、希望の光明が眩ゆく輝き出て、暗い冷たい家中を照すかと思つた。

『お母さん、そのお話で能く解りました。此品が……二十年も忘れられて居た此品が今の貧苦の場合になつて出て來るといふのは、真くお父様のお蔭です。お父様が今の貧苦を救ふて下さるのです』

『左様だね』

と云つたが、芳枝は餘りに不意に感情を刺戟され、劇しい精神の動搖に、まだ夢心地で居るのである。

「お母さん、お金も有難いことは有難いけれど、この書付は妾達母子の爲に金に換へられぬ寶物です。お父様と妾達との關係がこれさへあれば立派に判るのですもの」

「真に左様だね、真に左様だね、あのモ一度讀んでお呉れ、讀んで聞かせてお呉れ」

それからそれへと追懐の深い昔事の記憶を辿つて居た芳枝は、書付といふことから一寸注意を話して居た。娘の詞にそれと氣付くと、實にそれこそは家の寶である黄金は一時の急場が助かるだけであるが、父子の證明をした記録は花枝の身に永久の守護神である。自分が死んで了つたら、浩造と花枝とが父子であるといふ事は誰が證明する者もなければ一片の書いた物も残つてはしない。その事のみ執着を惹かれて、モウ死ぬる病氣らしいのを唯氣の張りにのみ生きて居るのではないか。

花枝が讀む書付を耳を澄まして聞いて居た芳枝は。

「オ、それが有れば……それさへあれば」

と云つて花枝の手を確かと握つた。と茫然となつて前方へ俯向く。

「あれお母さん、お母さんッ」

花枝の普通ならぬ聲に、臺所に居た魚藤は驚いて聲をかける。

それから間もなく、魚藤が宙を飛んで醫師を迎へにと奔つた。芳枝の病は急に變が來たのである。

(四四)

最後引揚げの凱旋軍隊を載せた御用船神戸丸は、いと不慮な航海を續けて居る。生きて再びこの海を渡らじと期した忠勇なる將卒達は、一波一波に故國に近づく船の上になつて無量の感慨に打たれた。けれども自づからなる満船の生氣は何處からとなく大きな歡聲となつて、機關の響と共に強く勇ましく轟き渡り、眞一文字の航路を矢を射る如く巨船は走つた。

名譽の大負傷に一時危篤を傳へられた龍岡中尉も此船に居る。左の頬の傷は癒へたが痕は無残に赤黒く、罪人の額上を焼いた烙印の惨話も思ひ出さるゝ痛ましである。殊動を稱へて其手を握り敬意を表する人々さへも、反けらるゝ片面を覗くには忍びなかつた。

『チト甲板へ出て見ないか、モウ六時間で下關へ着くさうだ』

元氣の溢るる聲で島中尉が船室へ入つて来た。敬三と御堀とは兄弟も及はぬ程の細やかな友語を續けて居る。御堀は二三便前の船で引揚げた隊と一緒にねばならぬのを、特に願ふて敬三の爲に居残つたのである。

『出たつて仕方が無い、甲板に居ても船室に居ても日本に着くの遅速は無からう僕は寝轉んで考へてる方が増したよ』

敬三は云ふ如く大の字形に寝轉んで居る。まだ病者扱ひで特別の室を與へられて居るのであるが、軍服は他と同じやうに着けて外套を羽織つた儘低い天井と睨み鏡をして居るのであつた。

『は、は、は、又お株を始めたな。モウ考へる事も大抵盡きさうなものぢやが。まあいから甲板まで交際つて呉れたまへ。今朝の話の次號を續けやう』
『イヤあの話ならモウ廢さう。あんな話は廢して……何も彼も忘れて居る間が苦痛が無いからね』

『馬鹿な事を云つちや可ん。話を廢めたつて事實は眼前ぢや。此船の推進機が一廻轉する毎に君に来る機會は漸次に近づくばかりぢや。俺はそれを歓迎して居るのに本尊の君は避けやうとする。斯んな馬鹿々々しい事があるものか』

『馬鹿々々しいと云ふが、僕は左様いつた風の詞をこれから屹度浴びせかけられるに違ひない、誰からも彼からも……』

『そんな無禮な奴が居たらこの島が相手ぢや。片ツ端から殴り飛ばしてやる。苟くも名譽の軍人に對つて。併も君の如き殉動者に對して』

『イヤ殊動といふものは繪や文章に描いて立渡だけれど……この僕の顔の現實の醜惡に怯びね人が幾人有るものか。之を見せたら歡迎の綠門の花も悉か萎んで了ふ』

だらう。捧げらる、花束も……」
「待て、待て、其次にはお定まりで喬子さんを呪ふのだらう。今夜と云ふ今夜は俺が其蒙を破壊してやる。さあ甲板に行かう、イヤ厭なら俺が連れて行く」
御堀は強て敬三を促し立て、月の明るい甲板へ出た。

(四五)

凱旋と結婚！。恰度春めいて来た季節の景趣と同じに、龍岡敬三の目の前には花鳥の色音よりも華やかに響しい希望が到来したのである。多くの人々は彼が名譽の殊勳を稱ふべく待構へて居る。富豪眞島家の令嬢喬子との結婚は東京市の凱旋祝賀會に参列が終ると同時、日比谷神社の神前で執り行はる、運びになつて居る。それに行賞の内沙汰も既に下つた。光輝眩い金鷄勳章と理想の女として憧れた美しい令嬢。その兩つがツイ手の届く岸にあつて、榮ある機會に向つて彼を戴せた船は急ぎ

に急ぐ。春風春水一時に、彼の周圍は打煙むる青霞のやうな平和が取巻いて居る。それに敬三は氷の如く冷たい氣分で居た。平和の本尊は枯木のやうな寂し味を見せ、この壯なる凱旋軍の列に有りながら、萎へ疲れた敗殘の面影を宿し、同船の人々を怪しみ驚かせた。

春は櫻花の國に來たのだらう、月に朧の風情が加はり、浪にも激澁の姿があつた友に強られて今甲板に出た敬三は、左も物憂さうな姿勢で、足どり重く欄干に近づくど、スグに俯向いて波を凝視つた。御堀はその脊をトンと叩いて。

「オイ、甲板へ出たつて左様俯向いてばかり居ちやア無益だ。寢轉んで天井を眺めてると同じぢやないか、イヤ此處の青天井を見るが可い、面白い雲が出て居るぞ久し振に雲の講義でも聞かうぢやないか」
斯う云つて二脚の椅子を運んだ。

『雲かね』

と云つて敬三は氣の無い顔で一寸空を仰ぎ椅子にかける。

「ヤアお月様は暉を被てござるね、道理で糗糊してる。誰かの気分によく似た夜景だ。なあ龍岡ははははは」

「月も僕に同情して居るのだらう」

「はははは、日本のラマルク先生も斯感傷的詩人になつちやア心細いな。そんな事を云はないで今夜の天象を説明して貰ひたいね。あの牛乳を覆りかやした様な雲は何と云ふのだね」

「僕はモウそんな事は……僕には雲よりも人間の」

「止せ、止せ。それから先を云ふのは止したまへ。人間の研究なら失禮ながら我輩の方の畑ちや。君は矢張日本のラマルク先生となつて前人未發の大事業を遂げて呉れなくちや可かん」

と首を振つて。

「オイ、早く説明して呉んどあの雲が妙に變色して來たぞ。牛乳に紅茶が混つて來よつたせ、彼雲をレセプションコ、ア雲さでも云のかね」

奇体な問を左も仰山らしく發して、沈鬱し切つた敬三の精神を他の方へ外らせやうと努める。

「そんな雲があるものか」

「だつてあの獨逸酒場で出した茶に似てるぢやないか」

「はははは、彼雲は卷雲と云ふのだよ」

と敬三もツイ引き込まれる。御堀は意中で占めたと喜ぶ。

「シーラス？何を知らすのだい」

と云つて我ながら拙い洒落に呆れる。敬三は可笑くもないが同じ顔をして。

天候の變化を知らすのだ。乳褐色が漸次濃くなつて下へ下へと舞ひ降る、低氣壓の先鋒だ。月の暈もあの所爲だよ。今に月も雲も眞暗の闇に吞れて了つて、恐ろしい暴風雨が襲つて來る先觸れだよ」

「暴風雨？、オイ龍岡それは眞實かい。戯談ぢやないせ。船でそんな物に出遇つちや大變だ。眞面目で觀測して呉れよ」

と御堀は急に情氣た。陸では鬼とも取組みさうな彼も船には至つて弱いのである。

「けれども惜しいことには此船の方が先に着くよ。七時間ばかり経たんと襲つて来まい。一萬呎の高空から落ちて来るだから」

「何でそれが惜しい事だい。君は船で暴風が喰たいのかい」

「ウム、何ぞそんな事件に出合つてこの醜い肉體を破壊したら愉快だらうと思ふ」

と敬三は恐ろしい事を何の苦もなく云つた。御堀は堪りかねて聲を激まし。

「大馬鹿ッ。龍岡敬三は大馬鹿者になつたなッ」

(四六)

御堀は聲を荒くして「大馬鹿者」と罵ると、ズツと椅子を寄せて敬三の身体に觸つて顔を覗き込んだ。

「一萬呎の空にある雲を仰いで七時間後の暴風雨を豫知する事の出来る君だが、人情の観測にかけては目の潰れた大馬鹿者だぞ。君はまだ喬子さんの事から煩悶を脱し得ないのだな。喬子さんの變心を恐るゝの餘り、一種の幽鬱病を起した君は、僕があれ程説き破つてもまだ疑惑から覺めないのだな」

敬三は何とも應へず、力無げに腕を組んで御堀の顔を眺めて居る。

「今夜は僕が最後の説法だ。之で覺めなければ何うとも勝手にするが可い可いかね君が研究範圍の雲に北喩を取つて遣らう。ホイ龍岡、一寸空を見い、あの月を見いホイ見いと云つたら見ないかい」

腕を押へて搔り動がす。敬三は役に取られたやうな顔をして茫然と空を見上げた。

「あの月の暈だね。あれを僕達は小供の時にお月様の病氣だつて教へられて居たのだが、矢張左様かね。月の裡に住んでる嫦娥とか云ふ女の神様が持病の瘵が何か起して、それで陰氣な暈を被てござるのだが、矢張今でも左様かね」

「馬鹿々々しいことを眞面目腐つた顔で云つて返答を返る。」

「下らんことを」

と敬三は又俯向いた。

「イヤ下つても下らなくても可い。あの月の暈の説明をして呉れ。得意の問題ぢやないか」

「何を云ふのだい……暈は暈ぢやないか。水蒸氣の作用ぢやないか」

「水蒸氣の作用！。するとお姫様の瘰癧の象徴ぢやないね。月その物の本體には何の障害も變化も有るんぢやないね」

「判つてるぢやないか。そんな戯談を廢して僕の爲に……」

「イヤ戯談ぢやない、頗る眞面目だ。眞面目に君の爲に計つてるのぢや。そこでオイ龍岡、君はあの喬子さんを今夜の月の如く見ることは出来ないのかい」

「何う云ふ意味だね」

と敬三は始めて身を入れた聲である。

「月の暈は月の本體に變化が有るんぢやない。喬子さんに對する君の疑惑は月の周圍に輪をかいた黒い暈ぢや。君は何故その暈を取つて月の本體を見んのか」

御堀の聲は鋭かつた。

「負傷の爲に醜い顔になつた、その醜い顔は屹度喬子さんの熱した戀に水を注ぐに違ひない、愛想を盡かされるに極つて居る。と云ふのが君の煩悶の原因ぢやないか月の如く美しい喬子さんの戀は始終に變化の有るべき筈が無い。中間を隔てる水蒸氣を除つて見たら、煌々たる月の光は何時も澄み切つて居るのだ」

「君は何時もそれを云ふが、斯んな醜い……自分でも愛想の盡きる此顔を見て、喬子の心理状態に何の變化も生じないと斷言し得るかね」

「斷言を通り越して僕は保證すると云つてるぢやないか。戀は決してそんな水臭いものぢやない。尠くとも喬子さんの戀はそんな輕薄な、形而下の卑しい欲望で成立つた戀でない事を信するのぢや。それは喬子さんから寄越すあの綿々たる情緒を盡した手紙でも判るぢやないか」

「けれども斯んな……斯んな殆ど先天的の不具同然になつた僕を見たら驚き易い處女の精神に何らかの動搖を起さないと僕は信ずることが出来ぬ」
「それが即ち疑惑の暈ぢや。それを拂ひ除けて眞の戀の光を見るが可い。君が煩悶する様な事情で喬子さんの方から結婚を拒む！そんな馬鹿々々しい事があつたらこの島御堀が保證の責任を負ふて腹でも切つて見せる天象の研究では君には敵はないが、情界の觀測なら我輩の物だ。安神したまへ、安神したまへ」

(四七)

「や、いよ／＼歸つて來るな」

と云つて男は展げた新聞紙の七面に險しい目を屹度注いだ。大分に疲れた黄八丈の丹前を着て、女のする伊達巻を緩う結んだ、疊に腹這ひの姿はこの藝妓自宅の座敷に極めて似つかはしい遊び人の風体であるが、色は目立つほど蒼白く、目鼻立は

美男の部に入るべき優がたの容貌である。

目を注いだ紙上は二號活字の掲題を派手に組んだ二段ぬきの記事で、殊勳中尉の凱旋と大きく、小掲題には祝賀會と華燭の典と記されてあつた。

「……青島攻略軍の先鋒となつて開戦當初より武名を専らにしたる〇〇聯隊に屬し山東の風雨屢々我軍に不利なりし際専ら氣象觀測の任務に従ひて偉功を立て、猶攻撃の日單身敵の砲壘に突進して之を奪取し身、重傷を蒙りて一たび戦死をさへ傳へられたる殊勳中尉龍岡敬三氏は來る二十一日午後六時東京驛着の最終引上げ部隊と共に凱旋する由なるが氏は翌日舉行の市主催祝賀會の終ると同時豫て婚約ありたる富豪眞島浩造氏の令嬢喬子と目出たく華燭の典を擧ぐるとぞ……」

口早に讀み了るとホツと息を吐いて、手に持った新聞を忌々しさに疊に投げ出す。此時後の襖がスツと明いた。

「オヤまだ出かけないのね、呆れちまふね此の人には」
と粗雑な詞の主は二十五六の藝妓風の女である。襖を捉まへた儘入らうともせず

男の横になつた姿を凝と見下ろした。

『左様がみくくと追立てなくとも可いさ。今新聞を讀んでるところだ』

『だから呆れると云つてるのですよ新聞なんか能く悠長に讀んで居られるわね』

『さう急に邪慳にせずと置けよ、俺だつて新聞位讀まなけア世間に遅れるじやないか。翌の日邸からの迎へが立つて見る、男爵家の御當主様だ。議會の壇上へ現はれて』

『は、は又お株が初まつたのね。お芋の煮わたも御存じないつてねのは貴郎の御先祖様ね、争へないわね』

女は焦れ氣味に、罵る様な詞を浴びせかける。男は平氣に敷島の空袋を弄りながら。

『お芋は何うか知らないが、時々お座敷が暖味な線香で遅れる時には、釜の下を焚いてお待受け申す事もありましたつけ。ア、噫だ、爲まじきものは藝妓家の食客か』

『イヤ唐津さん、何ですつて。妾いつ怪しい線香を賣りました、イ、エさ妾貴郎をいつ食客扱ひにして？』

女はバタ／＼と男の傍へ坐つた。根の落ちた島田はガツクリと頰れて、亂れて下る毛を酒で荒れた唇に噛む。白粉やら油やら、年増藝妓の熟し切つた色の匂ひは強く漂ふた。其耳元へボンと音させて、男は貰の紙袋で悪戯をする。吃驚した女の顔はモウそんなに怒つては居なかつた。

怒つて見せたが一向衝へが無く、その中にツイ自分の方から折れて優しい笑顔になり、ア、又負けたと思つた時でモウ男はグツと深く弱點を取つて押へて居る。眞個に惚れたといふことほど始末に了へぬ難義な物は他に有りはしたい。と玉子は染々と自分の戀に呆れて居る。自棄に煙草を吸ひつけて、憎い癖に見なければ虫の納

(四八)

まらぬ男の顔へフツと煙を吹掛ける。紫の煙の中に白い男の顔は雨の蛙の様に落ちて浮いて見える。ほんとに貴郎は憎らしいよと云つて膝でも抓めるのが斯な時の幕切になるのだが、そんな事はモウ微が生れた。黙つて不自由に脊中を向け合つて居る間に、嬉しいやうな苦しいやうな戀の情緒は種々に亂れる。

『まあ左様怒りたまふな。唐津夏彦の最後が近づいたせ。私を何とか彼とか思つて呉れると云ふのが嘘でなけア大に同情して呉れたまへ。同情するなら今此時だよ』

と云つて夏彦は今の新聞を玉子に見せた。

『まあ龍岡つていふ軍人歸つて来るの？おうやおや！』

『歸つて来るばかりなら可いさ。めでたく華燭の典を拳ぐる由いさ』

『くわしよ、くつて何！』

『婚禮さ。あの眞島の嬢と公然夫婦になる披露をするのだ。何だい、私に同情するだらうね』

『それはお氣の毒さまねね』

『ホイ／＼左様他人事にしないでモ少し眞剣に同情して貰はうぢやないか。あの嬢が此方へ落ちたら、私よりお前の方が大きな幸福に有つくんた。眞島の家からいくらでも引出して好き放題の面白い事が出来るのだつた。ア、惜しい事をしてしまったよ』

『ほ、ほ、逃げた魚は大きいのだつてね』

『イヤ實際だよ。こればかりは諦めがつかない。畜生ツ龍岡の青二歳奴』

『妾眞島の嬢さんが貴郎の物になるのを喜ぶ程お人柄にはなれないけれど……貴郎の爲にはお氣の毒ね』

『お爲ごかしでなく眞面目に損徳の算盤を持たうじやないか、お前の足を洗ふ位朝飯前つたよ』

『左様巧く運ぶのだつたら惜しい氣もするけれど。だつて此事だつて貴郎の遣り方が拙いからよ。相手は敏捷い軍人だもの、貴郎の様に悠長に構へて居ちやア』

『又お芋の衰れたもかね』

と云つて寂しく笑つてグルリと仰向けになり、兩手で頭を挟んで天井を覗む。

『ナアニ軍人だつて何だつて敗けを取るのじやないが、今度は全く油断だつたよ。戦死したといふのをウツカリ信じたのが大失敗さ。助かつたと聞いたから驚いて』

と云ひかけたが急に口を禁んだ。唐津男爵家の嫡子といふ果報と共に持て生れたのが放蕩で、龍岡らと同一士官學校の出身であるが、少尉時代に品行の廉を以て休職となり、間もなく廢嫡された後はズノノと目覺しく墮落した。九州邊を壯健で迂路ついた事もある。或時はフロックの禮装美々しく紳士姿で政談演説の壇上に立つ、かと思ふと赭い緑衣を着て暫く世間から隠れたこともあつた。唐津夏彦の名は警察の帳面に三角印の注意人物符號が確かりとくつ付いて載つてあつた。此頃ではこの神樂阪藝妓の玉子の家を巢にして、何をすることもなく男妾同様に日を暮すのであつた。

(口九)

急に口を噤んだ夏彦はマクムと起き直つた。胡坐の膝頭を握り拳で叩きながら深く考へ込んで居るのを玉子は可笑しがつた。

『物を考へ込むなんて柄にないのね貴郎には。ほゝほそんな眞面目な顔が人柄に無いといふ事よ』

『……………』

『まあ大層な鬱ぎ方ね。お愁傷様、喬子さんをお察し申します』

と云つてグイと煙管を奪る。夏彦は堅く結んでた口を開いた。

『戯談は廢して相談相手になつて貰はう。私は此事ばかりは此儘に抛つて置けないのだ。何故と云へばさ、相手は同じ軍人仲間だつた龍岡敬三だ。私が喬子を手に入れやうとして居る事は世間は誰も知るまいが、私の意地は全潰れだ。それに喬子の

親父の浩造には薄々希望を漏らした事もある。彼奴強慾な野郎だから、私が邸に若様で納まつてる間はチャホヤ吐かしあがつて、彼んな娘でも御意に召せば何時でも差上げますと云つたことがある。それを私に斷りなしに龍岡に嫁入らせるとは不埒千萬な奴だ』

『ほ、ほそれは當然だわ。華族の若様でこそ有難いだけれど。今の貴郎に可愛い娘を遣る親はまあ無いわね。それを思つたら妾の深切が解るでせう』

『酷い事を云ふね。併し忘れはしないさ。忘れないから兩人で早く暢氣に暮す計畫を立てやうと思つて苦心してるのだよ』

『左様聞くと頼もしいけれど……餘り當にしない方が賢いのかも知れない』

『賢い俺も今度は遣られたた』

とまた何か考へ出した。
『それで何うしやうと云ふの。喬子さんの方はモウ地團駄踏んだつて追付かないわね。それよりは先刻云つたやうにお邸で何とかして』

『イヤ私は此婚禮を破壊してやる』
と夏彦は押被せて云つた。

『斯うなれば龍岡に對する意地ばかりぢや無い。眞島浩造にも痛快な復讐をして目に物を見せてやる。何でも彼奴が龍岡のやうな貧乏中尉に可愛い娘を呉れてやるには大きな魂膽があるに違ないひ私が睨んでるのは龍岡奴秀才だといふので陸軍大臣の後藤さんが目を注て居る、そこへ今度の殊勳で馬鹿に評判が善いものだから、あの男を娘の夫にして縁を繋いで置けば、自分の商賣の上にキツと利益がある、といふ算盤を立て居るのに相違ない。強慾な老爺だから金が儲ければ娘を犠牲にする位の事は何とも思つては爲ないからね。だから此結婚を破壊してやれば彼奴の苦痛は大したものだ。滅茶々に壞して置いて其隙で此方の仕事をしてやる。喬子を入質さ。之が成功すれば三萬や五萬は鬩斗をつけて先方から捧げて来る。イヤ屹度持つて來させなければア置かん』
『だつて新聞で見るとモウ目前ぢやないのお嫁入りは』

「二十一日に凱旋して其翌日に式を擧げるとある。目前だ」
夏彦の目は異様に輝いた。

「何うすることも出来やしないわ」

「イヤ出来る、出来る。私がスグに其れに着手する」
と立上つたが。

「それにつけても軍事費が要るね。オイ本統に無いのかね金は」

「有る位なら厭なお邸へ行つて下さい云々、ないわ、モウ一週間ばかりお金の顔見たことなし！」

「チョッ吝つ垂れてるなア」
舌打したが當惑の顔。

「チト勉強して手筈へのある弗箱を捉まへたら何うだね」

「ほ、憚りさま、怪しいお線香は誰やらが賣らせないのよ」

「はッは、此奴ア可かつた。着換へさせてお呉れ、出て来やう」

『目的があるの』

『無い』

『無いのに何處へ出かけるの』

『出かけなくても無いぢやないか。同じ無いなら外の無いに觸突つて見やうさ、ははは』

(引續き後編を御読み下さい)

羽 命 全 参 册
様 作 武 士 系 全 壹 册
荷 目 電 全 参 册
香 録 男 全 四 册

上記の通りいづれも
樋口隆文館より出版
いたし居候

雲 (終)

樋口隆文館

營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版... 及び其御賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君... 及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候
 △御賣目録御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ
 △樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新成發行致べく候
 △樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候
 △樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大坂八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

著者權所有

附典雲

著者 羽 様 荷 香
 發行者 樋 口 源 次 郎
 大坂市南區鰻谷仲之町 二百二十四番屋敷
 大坂市西區新町北通 一丁目五十番地
 印刷者 河 上 貞 次 郎

發賣元

大坂市南區三休橋 鰻谷南入西側

樋口隆文館

(振替口座大坂八七九七)

大正四年十二月十日印刷
 大正四年十二月十五日發行

(定價金五拾錢)

江見水蔭君作 八幡白帆君畫

探偵の娘

全二冊

木版彩色畫入美本
 定價各壹冊 四十五錢宛
 送料 一冊二付六錢
 二冊二付八錢

米國より新歸朝の飛行家と化て、甘々と華族の令嬢を弄ばんとする大悪黨あり、外面は如菩薩にして内心は如夜叉なる泥蟹龍子といふ大毒婦あり、猾智の天才眞に驚嘆すべき蛛の子仙太なる悪少年あり、動物の生血を搾り取て戦慄すべき或る秘密の發明に苦心しつゝある怪奇不思議の老異人あり多數の部下を有して兇猛比すべき無く、其名も恐ろしき黒蛇伴作といふ、土屋に潜める盲目の怪賊あり、著者が獨特なる神奇幽怪の筆は、かゝる人物を隨所に躍動せしめて、以て讀者をして、變幻恍惚の境に遊ばしめん、乞ふ一讀せられよ。

匿名子君作 歌川珣舟君畫

可憐の棄兒

全三冊
 木版彩色 入類美本
 實價各一冊 四十五錢宛
 送料三冊二付八錢

あ、薄命なる可憐の兒よ、彼は如何にして冷酷無情なる生の母に棄てられ、又如何にして慈愛温き血肉の父と別離の憂き愁みを見たか、親は無くとも子は育つとはいへど、父母に離れて只一人、影も淋き孤兒の行末が、如何に凄慘にして且つ悲哀なるかを見られよ。

橋本埋木庵君作 歌川珣舟君畫

片破れ月

木版彩色畫畫挿入
 定價五十錢
 送料六錢

これは東京柳橋で、俠藝妓と云はれた丁字屋の『小いね』に關係した、悲劇的なる事實小説で一冊で讀切の物でございませう、他店にも類似の題の物がありますから、御購求の節には、大坂樋口隆文館發行の物と御指定を願ひます。

島川七石君作 山本英春君畫

戀のしづらみ 全三冊

木版手摺極彩
美人挿畫附
定價各一冊五十錢宛
送料各一冊六錢

蘭子と信吉 全三冊

全六冊一時に御注文
の方に限り送料共に
特價 貳圓五拾錢
(但し内地限り)

本書は、著者が一代の心血を傾注して創作せられた一大雄篇にして、其内容たるや、主人公は健全なる志想を抱いて帝都に苦學する一青年を以てし、此快男子に配するに、可憐なる麗人、失戀の令嬢、奸誘憎むべき賣國奴、刺客、女優、老政治家、歌妓、亡命の志士、不良青年、變裝刑事、其他社會に在らゆる階級の人物をば、舞臺の變化と共に活躍せしめて、以て讀者を起伏重疊たる情海の波瀾の中に捲き込まんとする、眞に近來稀に見る良家庭小説にして、又絶好の立志的戀愛悲劇小説である、乞ふ愛讀を賜はらん事を。

江見水蔭君作 八幡白帆君畫

中央新聞 掲載小説 大正五人女

全五冊
木版手摺
極彩色美人
挿畫附
定價各一冊五十錢宛
送料各一冊六錢宛

全五冊一時に御注文の方に限り送料共に特價金貳圓(但し内地限り)

本篇は約九ヶ月の長期に亘り、東都中央新聞に掲載せられて空前の好評を博し、中外數十萬の讀者をして心酔歡喜しめたる一大活劇小説にして實に過去に於ける數多き水蔭先生の作物中にも拔群傑出せる最長の雄篇である。

編中に活現する女の種類には、女優あり、藝妓あり、猛獸使ひの女あり、富豪の奥様あり、墮落女學生あり、賢夫人あり、薄馬鹿女中あり、淫婦、毒婦、菩薩、夜叉、個々入り亂れて興味深き大活動をなし舞臺の變化幻奇妙怪を極めた、近來稀に見るの面白き小説である。

渡邊默禪氏著 長谷川小信氏畫

事實怪の怪

全二冊

表紙口繪共極彩色美本
實價各一冊四拾五錢
郵稅各一冊六錢

これは默禪子が方寸より描き出した。虛構架空の小説にはあらず。由緒正しき東北の名家として其名を知られし黒石子爵「憚つて假名を用ゆ」家に於ける。家庭大混濁の真相を描寫した。奇々怪々なる事實譚であつて。篇中に活動する人物には。表に忠義の假面を被り。そして腹中には恐るべきの大野心を包んで。御家を横領せんとする野心家も在れば。マンマと若殿を掌中に丸めこんで。スندنニ大仕事を爲すべんとした。外見は佛菩薩のやうに優く。而その實は夜叉鬼神よりも醜腕物凄い怪美人も居る。車夫に連れ出される可憐の嬢様もあれば。好いた藝妓と手に手を執つて。落人と洒落玉ふ貴公子もあらうといふ。至極面白い怪小説でございますから是非一度は讀んで見て下さいと。隆文館の主人がお願がいたします。

新田 静海 君作
谷 洗馬 君畫

立志富の力

各冊共木版
極彩色口繪挿入
全三冊
實價各一冊四十五錢宛
送料三冊二付八錢

猛虎と見ては石に箭の穿ちし故事もある、精神一到何事をか爲し得ざらめやと、一朝、富の力の壓迫の大なるに感奮して、猛然志を立て、故郷の地を去り、帝都に出でたる水呑百姓の子は、僅々十年の短日月の間に、能く百萬圓の大富豪と成り得た、彼は如何なる手段方法にて此富を得たか、如何に奮闘努力して此富を得たか、彼をしてかく發奮せしめたる動機は何、其處に讀者を感動せしむべき血と涙との物語があるのだ。